

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

せちご
清児遺跡

— 発掘調査報告書 —

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第31輯

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

せちご
清児遺跡

— 発掘調査報告書 —

1 9 8 8

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



清見遺跡全景（北西より）



清見遺跡全景（南東から）



379—OO出土土器



379—OO遺物出土状況（北東より）



1002-O B 全景（北東より）



III B 区北壁土層断面

序 文

清児遺跡は近木川右岸の中位段丘上、標高34～38mに立地し、地表面は良好な条里地割が明瞭に遺存することに加えて、奈良～平安時代の遺物が多量に表採されており、当該期の大集落の存在が予測されていました。ところが、これまで、この地域において、調査らしい調査事例もなく詳細はほとんど不明でした。

今回の調査結果については本報告書に詳しく記述しているところでありますが、予測されたとおり、奈良～平安時代の掘立柱建物群を中心とした集落跡と13世紀以降の大規模な土地開発の始まりを示す条里坪界溝とみなされる資料等を得ることが出来ました。なお当地域は、律令制下の和泉国和泉郡木島郷と日根郡近義郷に相当し、中世には清児、名越、森、三松、水間集落を包括する木島谷城にはば該当させられる木島庄に比定されます。今後、文献資料と発掘調査の成果を総合させた歴史構築が期待されるところで、本報告書がそれらの資料として大いに利用されることを願って止みません。

最後に調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました大阪府土木部岸和田土木事務所をはじめとする関係各位に謹意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会並びに大阪府下市町教育委員会に対し深謝申し上げます。

昭和63年10月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野 素雄

例　　言

1. 本書は都市計画道路貝塚中央線建設予定地内に所在する清見遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課技師、森井貞雄、小山田宏一、橋本高明が担当し、昭和62年6月16日に現地調査を開始、昭和63年3月4日に終了した。引き続き実施した整理事業を昭和63年3月31日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会及び地元関係各位の協力を得た。
5. 調査及び報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課のほか、南川孝司（揖河泉地域史研究会）、西岡巖（貝塚市教育委員会）の各氏から御指導、御教示を得た。記して感謝の意を表する。
6. 遺構写真撮影は調査各担当者、遺物写真撮影は小倉勝が担当した。
7. 調査は当協会の発掘調査規定により国上座標系第VI系を基準に地区割りを設定して行った。本文中及び挿図に用いた座標もこれに従い、座標数値はkm単位で記した。方位は座標北を示し、座標北より真北は東偏0度2分を磁北は西偏6度10分を測る。なお、標高はT.P.で表示した。
8. 遺物には通し番号を付し、本文中の遺物番号は、遺物実測図番号、図版遺物番号と一致する。
9. 本書で用いた土壤色、及び土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖5版』(1976)による。
10. 第1図は、国土地理院発行1:50,000地形図「岸和田」(1986)、第2図は陸軍陸地測量部発行1:20,000地形図「信太山」「貝塚村」「内畠」(1885)、第4・74図は大阪府都市計画地形図1:2,500をもとに作成した。
11. 本書の執筆は、担当調査区単位にI・III・IV区を森井と小山田が、II区を橋本が担当した。編集は小山田が担当した。

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	(小山田)	1
第2章 遺跡の位置と環境.....	(森井)	2
第3章 調査の方法.....	(小山田)	5
第4章 調査の成果.....	(森井・小山田・橋本)	8
第1節 層序.....		8
第2節 小調査区の概要.....		17
第3節 飛鳥時代.....		19
第4節 奈良時代～平安時代.....		21
第5節 鎌倉時代～室町時代.....		42
第6節 江戸時代.....		50
第5章 まとめ.....	(小山田)	58

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1/50000)	1
第2図 遺跡分布図 (1/50000)	3
第3図 大阪府地域計画図の図割り.....	5
第4図 区割りと小調査区位置図 (1/2500)	6
第5図 北壁断面図 (1/120)	9～10
第6図 北壁断面模式図 (水平1/800、垂直1/80)	11～12
第7図 第Ⅲ層出土土器 (1/4)	14
第8図 第Ⅱ層出土土器 (1/4)	15
第9図 第Ⅱ層出土石器 (1/2)	16
第10図 375-OO出土瓦 (1/4)	18
第11図 637-OO出土鉄器 (1/2)	20
第12図 637-OO出土土器 (1/4)	20
第13図 637-OO平面・断面図 (1/60)	21

第14図	1001—OB出土土器 (1/4)	22
第15図	1001—OB平面・断面図 (1/60)	22
第16図	1002—OB平面・断面図 (1/60)	23
第17図	1002—OB出土土器 (1/4)	24
第18図	1003—OB平面・断面図 (1/60)	24
第19図	1004—OB出土土器 (1/4)	25
第20図	1004—OB平面・断面図 (1/60)	25
第21図	1005—OB平面・断面図 (1/60)	26
第22図	1006—OB出土土器 (1/4)	27
第23図	1006—OB平面・断面図 (1/60)	27
第24図	1007—OB平面・断面図 (1/60)	28
第25図	1007—OB出土土器 (1/4)	29
第26図	1008—OB平面・断面図 (1/60)	29
第27図	1009—OB平面・断面図 (1/60)	30
第28図	1009—OB出土土器 (1/4)	30
第29図	1010—OB平面・断面図 (1/60)	30
第30図	1011—OB平面・断面図 (1/60)	31
第31図	1012・1013—OB平面・断面図 (1/60)	32
第32図	1014—OB平面・断面図 (1/60)	32
第33図	1015—OB平面・断面図 (1/60)	33
第34図	III A区西部柱穴群出土土器 (1/4)	34
第35図	III A区西部柱穴群 (1/120)	35
第36図	III A区東部柱穴群 (1/120)	35
第37図	IV D区柱穴群 (1/120)	36
第38図	275—OO平面・断面図 (1/40)	36
第39図	739—OO出土土器 (1/4)	37
第40図	377—OO出土土器 (1/4)	37
第41図	377・378—OO平面・断面図 (1/40)	38
第42図	379—OO平面・断面図 (1/40)	39
第43図	378・379—OO出土遺物 (1/4)	40

第44図	610-OO出土土器 (1/4).....	40
第45図	614-OO平面・断面図 (1/40)	41
第46図	347-OS出土土器 (1/4).....	41
第47図	347-OS平面図 (1/80)	41
第48図	483-OP出土土器 (1/4).....	42
第49図	32-OO出土土器 (1/4)	42
第50図	31・32-OO平面・断面図 (1/40).....	43
第51図	1-OS出土土器 (1/4)	43
第52図	1-OS平面図 (1/100)	44
第53図	146-OS断面図 (1/20)	44
第54図	473・474-OS断面図 (1/20)	44
第55図	472-OS断面図 (1/20)	45
第56図	244-OS土器出土状況 (1/20)	46
第57図	244-OS出土土器 (1/4)	46
第58図	87・135・244・288-OS断面図 (1/20)	46
第59図	I B・I C・III B区溝 I・II類平面図 (1/200)	47~48
第60図	236・235-OS断面図 (1/20)	49
第61図	875-OX平面・断面図 (1/60)	49
第62図	588-OW出土遺物 (1/4)	50
第63図	588-OW平面・断面図 (1/40)	51
第64図	616-OO出土土器 (1/4)	52
第65図	641・654-OO平面・断面図 (1/60)	52
第66図	641-OO出土土器 (1/4)	53
第67図	616-OO・617-OS断面図 (1/60)	53
第68図	616-OO・617-OS平面図 (1/120)	53
第69図	617-OS出土遺物 (1/4)	54
第70図	I A区東部小溝群 (1/200)	56
第71図	I B区東部小溝群 (1/200)	56
第72図	現条里地割と中世期区画溝の位置関係図 (1/5000)	59

表 目 次

第1表 遺構の種類と記号.....	7
第2表 III A区西部柱穴群計測表.....	60
第3表 III A区東部柱穴群計測表.....	62
第4表 III B・III C区柱穴群計測表.....	63
第5表 IV D区柱穴群計測表.....	66

図 版 目 次

巻頭図版 1 清見遺跡全景（北西より）、清見遺跡全景（南東より）	
巻頭図版 2 379-OO出土土器、379-OO遺物出土状況（北東より）	
巻頭図版 3 1002-OB全景（北東より）、III B区北壁土層断面	
図版 1 清見遺跡周辺（木島谷）空中写真	
図版 2 I A区全景 I A区東部小溝群・I -OS全景	
図版 3 I B区全景 I B区東半部全景	
図版 4 I B区西半部全景 I B区87-OS全景	
図版 5 I C区全景 I C区1001-OB全景	
図版 6 I C区1002-OB全景 I C区建物柱穴	
図版 7 I C区288・244-OS全景 244-OS遺物出土状況	
図版 8 I C区235・236-OS全景 I C区1021-OF全景	
図版 9 II A区全景 II B区全景	
図版10 II A区1010-OB全景 II A区1011-OB全景	
図版11 II A区1012・1013-OB全景 II A区1014-OB全景	
図版12 II B区1015-OB全景	
図版13 III A区全景 III A区東半部全景	
図版14 III A区1003-OB全景・柱穴	
図版15 III A区377・378・379-OO全景 379-OO遺物出土状況	
図版16 III A区347-OS全景 III A区西部柱穴群全景	

- 図版17 III B区全景 III B区244・288-OS全景
- 図版18 III C区全景 III C区柱穴群
- 図版19 IV A区全景 IV A区527-OO全景
- 図版20 IV B区全景 IV B区西端全景
- 図版21 IV B区1005-OB全景 IV B区1006-OB全景
- 図版22 IV B区1007-OB全景 IV B区建物柱穴土層断面
- 図版23 IV B区617-OS全景 土層断面
- 図版24 IV B区588-OW全景 石組
- 図版25 IV B区588-OW刷木 IV D区全景
- 図版26 IV D区小溝群全景 IV D区637-OO全景
- 図版27 I A区北壁土層断面 III B区北壁土層断面
- 図版28 II A区北壁土層断面 IV A区北壁土層断面
- 図版29 第III層、第II層、637・378・379-OO、244・617-OS、406-OP出土遺物
- 図版30 第II層、637・379-OO、588-OW、1009-OB出土遺物
- 図版31 第II層出土遺物
- 図版32 第II・III層出土遺物
- 図版33 1002-OB、32-OO、244-OS、1012-OB、1015-OB出土遺物
- 図版34 739・655・376・377-OO、405・386・396-OP、347-OS出土遺物
- 図版35 1006・1007-OB、610-OO、616-OO、588-OW出土遺物
- 図版36 617・621-OS、646・652-OP、1009-OB出土遺物
- 図版37 637-OO出土遺物

付 図 目 次

- 付図 1 清見遺跡構図(1) (1/200)
- 付図 2 清見遺跡構図(2) (1/200)
- 付図 3 清見遺跡構図(3) (1/200)

第1章 調査に至る経過

清見遺跡は貝塚市清見に所在し、大阪府文化財分布図によると本調査区の東方に拡がる遺跡で、分布調査では奈良時代～平安時代の遺物が報告されている。^(注1)このたび本遺跡の西辺に接する府道牛滝貝塚線が都市計画道路貝塚中央線として拡幅されることになり、建設工事にあたって清見遺跡の当工事区への拡がりが懸念されるに至った。これを受けて大阪府教育委員会文化財保護課と府土木部の間で協議が行なわれ、まず試掘調査により遺跡の拡がりを調べることになった。試掘調査は当協会により、1986年12月から3月にかけて実施され、その結果、遺構および遺物包含層の存在が確認され清見遺跡が当地まで伸びることが明らかになった。この調査成果をもとに再度府教育委員会と府土木部とで協議がもたれ、当協会が府教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施することになった。当協会は岸和田土木事務所と1987年4月1日に委託契約を結び、現地調査は同年6月16日には着手した。

注（1） 元興寺仏教民族資料研究所『泉州丘陵地区遺跡に関する分布調査報告書』1973、ここでは清見遺跡を二ツ池東遺跡と呼称している。



第1図 調査区位置図 (1/50000)

第2章 遺跡の位置と環境

清見遺跡は近木川（コギガワ）右岸の中位段丘上に立地し、標高34～38mを測る。貝塚市域の平地部にほぼ相当するこの段丘面は、三ヶ山丘陵と津田川、七山丘陵と貝田川に西され東西3km、南北5.5kmの北西に開く扇形を呈す。その南半部の丘陵に挟まれた幅2.5km、長さ3.5kmの谷地形は木島谷（キノシマノタニ）と呼ばれ、清見遺跡はその谷口付近に位置する。近木川は段丘面を下刻しつつ南寄りを流れ、清見付近では川床と約7mの比高差を持つ。段丘面には起伏が見られ、近木川と津田川河口の間には、脇浜付近と貝塚寺内町付近から始まる2本の谷地形が南東に延びる。清見遺跡はその谷奥にほぼ当たる。なお遺跡と三ヶ山段丘との間にも浅谷が存在する。微高地上には旧集落、溜池が立地している。

近木川流域の歴史的状況は、貝塚市史（1950年）に詳しいが、近年の考古学的調査で特に古い時期の様相が次第に明らかに成りつつある。それらを時代順に簡単に述べる。

旧石器時代は、海岸寺山、新井ノ池、脇浜遺跡でナイフ形石器や剝片が知られている。縄文時代は、脇浜遺跡（晩期）が知られるのみでその間を欠いている。脇浜遺跡は海岸砂堆上に立地する。なお、畠中、ドビガ谷、森B遺跡などで縄文期と推定される石器が知られ、集落が存在した可能性がある。

弥生時代になると遺跡数は増加する。前期は、近木川左岸の沢遺跡（第I様式新段階）と脇浜遺跡のみで、今のところ海岸部に限られる。中期には、畠中遺跡（第II、IV様式）石才遺跡（第III、V様式の堅穴住居5棟、土坑墓）の他、木島谷の奥にも森B遺跡（第IV様式）が知られ、遺跡が段丘面上に広がったことを示している。他に麻生中新池、今池でも当該期の資料がある。後期では、新井ノ池、畠中、石才、脇浜遺跡が知られるが、第V様式でも後半が主体となるようである。時期不詳の弥生遺跡には、沢新田、河池、半田、麻生中、窪田、海岸寺山、ドビガ谷などがある。

古墳時代には、前期には、畠中、脇浜遺跡で布留式期の遺構が知られ、特に後者は製塙土器、飯蛸壺の多さから漁村的な集落と推定されている。前期末から中期初頭には全長72mの前方後円墳の丸山古墳が近木川左岸に築かれる。中期では、堀遺跡（中期前半）で堅穴住居群が、今池遺跡（中後期）で溝が知られ、沢共同墓地遺跡（前期～中期前半）では製塙土器が多く出土する。丸山古墳付近の地蔵堂遺跡では、墳丘の削平された中期後半の円墳が明らかになった。石才遺跡（中期末から後期）では掘立柱建物の倉庫群が検出され、



1. 清見道路
2. 沢野山道路
3. 四郎山道路
4. 谷山山東路
5. 明美之路
6. 沢井同馬連道路
7. 沢連路
8. 阿達連路
9. 須田連路(豊田尾寺)
10. 吉田連路
11. 地藏堂連路
12. 地藏堂寺
13. 丸山山南
14. 駒連路
15. 須治・神原・高小連路
16. 長榮寺等跡
17. 駒浜連路
18. 以保寺中連路
19. 以保寺生服寺山連路
20. 鹿連路
21. 小寺連路
22. 深和山古連路
23. 小瀬石山山連路
24. 土生連路
25. 立瀬連路
26. 駒町連路
27. 行合連路(駒首堂路)
28. 妻坂寺
29. 下平連路
30. 麻生山連路
31. 鮎井ノ連路
32. 鮎井乃連路
33. 今連路
34. 石才連路
35. 桃木連路
36. 石才山連路
37. 桃子方連路
38. 王子連路
39. 下石山連路
40. 不石城連路
41. 立瀬連路
42. 間北連路
43. 高井天神殿等、高井城跡
44. 行之連路
45. 二ノ連路
46. トヒ才行連路
47. 桃子方城跡
48. 平連路
49. 鮎井中野連路
50. 鮎井寺山連路
51. 鮎井行忠源連路
52. 鮎井行忠源連路
53. 鮎井山山場泉連路
54. 鮎井山山場連路
55. 鮎井山山場連路
56. 鮎井古治村(空山古墳群)
57. 鮎井古治村
58. 鮎井古治村
59. 天神山山連路
60. 天神山山連路
61. 天神山山連路
62. 八代才媛力
63. 下神家古墳
64. 大山大塚古墳
65. 向山古墳群
66. 鮎井古墳
67. 鮎井城跡
68. 向山古墳
69. 成木主山山連路(河津川上)、水海連路
70. 水海連路
71. 森古跡
72. 森古跡
73. 向山山連路
74. 今山山連路
75. 森山連路
76. 森入連路
77. 森ノ大塚古墳
78. 今山連路
79. 今山連路
80. 道我天神社連路
81. 水間寺連路

第2図 連路分布図 (1/50000)

館的な遺跡の可能性がある。畠中遺跡でも若干当該期の遺物がある。後期になると畠中遺跡で竪穴住居群が出現し、脇浜、半田遺跡でも6世紀後半以降に発展をみる。この時期の須恵器窯は、三ヶ山丘陵の先端に海岸寺山窯跡群、木島谷の近木川左岸に三松遺跡（窯）が築かれる。窯跡群の付近には海岸寺山古墳（円墳・横穴式石室）が位置する。時期不詳の散布地には、沢、下新出、麻生中新池、河池、沢西出遺跡がある。この地域は、集落遺跡に対して既知の古墳の数が極少なく、特に木島谷では開発が遅れていた可能性がある。

飛鳥～奈良時代は、7世紀代は畠中、堀、半田、森B、清児遺跡がある。また半田遺跡に近い秦庵寺は白鳳期の創建である。8世紀代は畠中、沢、清児遺跡で掘立柱建物群が知られ沢遺跡（8世紀後半）では柵に区画された建物群が明らかになっている。この時期の瓦を出土する遺跡は秦庵寺、畠中、堂ノ上庵寺が知られる。森B遺跡では、8世紀前半の大溝が大規模な耕地開発を物語る。水源池遺跡は、須恵器窯跡と想定される。時期不詳の散布地には、沢西北、沢海岸北、殿池、二ツ池がある。

平安時代は、前期には、畠中（9～10世紀）、堀（9世紀）、清児遺跡（10世紀）で掘立柱建物群が知られ、森の大池でも遺物を認める。特に畠中遺跡では集落範囲がこの時期に拡大し、その南に接して近義堂庵寺が所在する。後期には、殿池（12世紀中～後）で掘立柱建物群が知られる。瓦を出土する遺跡は長楽寺跡、窪田庵寺、地藏堂庵寺、水間寺、明楽寺跡（沢城跡）、高井天神庵寺（水蛭片出土）があり、一定の間隔を置いて分布する。

鎌倉時代は、地藏堂庵寺、王子（12世紀後～13世紀前）、殿池、畠中（13世紀前半）遺跡で掘立柱建物が知られる。森B遺跡（12～14世紀）では荒廃した耕地の再開発が想定されている。13世紀から15世紀にかけての遺物は、いわゆる中世耕土の中に細片としてかなり普遍的に見いだされ、集落が広く散在すると共に土地開発の進行を伺わせる。

室町時代は、積善寺城跡、森城跡などの在土地上濠の中世城郭の出現を見る。更に戦国時代には、貝塚寺内町をはじめ、沢城跡、高井城跡、千石堀城跡、三ヶ山城跡が加わるが、これらは、文献史料から全国統一を進める秀吉に対する根来、雜賀衆側の地元土豪を含んだ防御拠点であったことがしられる。

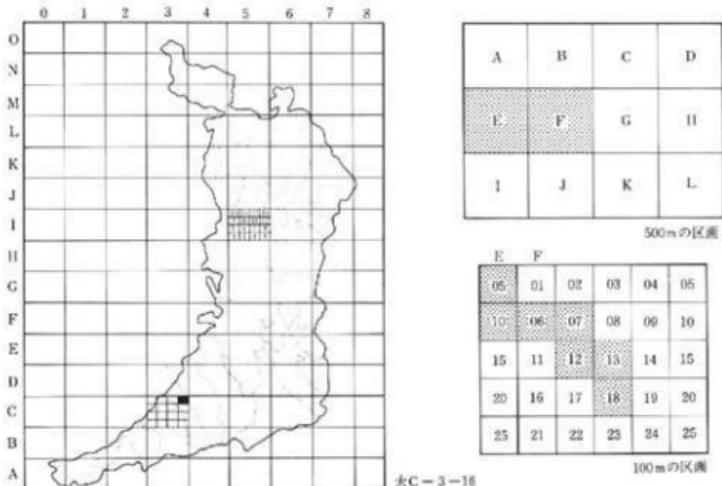
なお、当地域は律令制下の和泉国（設置は757年）と和泉郡木島郷と日根郡近義郷に相当し、近木川下流部の両岸旧南北近義村が日根郡に、その他が和泉郡に属した。中世に近義郷は高野山領近木庄に、木島郷は麻生庄と木島庄に分離した。木島庄は、清児、名越、森、三松、水間集落を含む木島谷域にはば該当する。今後、文献史料と発掘調査の成果を総合させた歴史構成が望まれるところである。

第3章 調査の方法

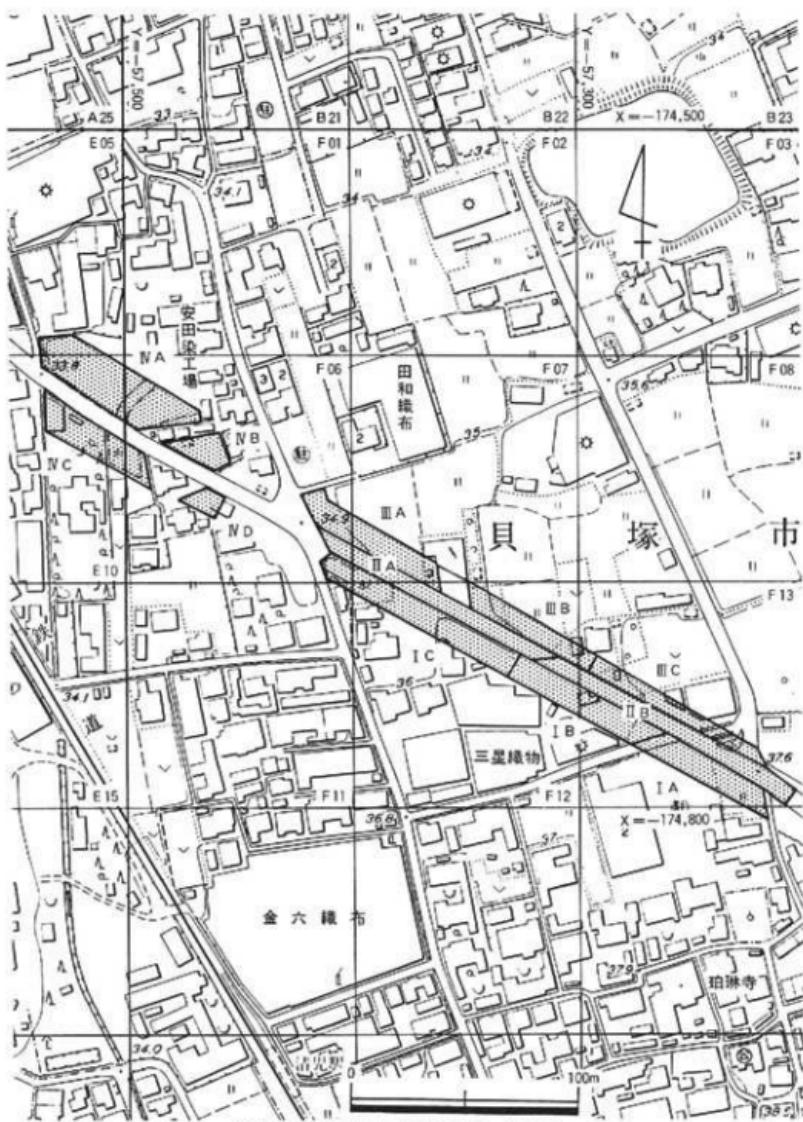
〈地区割と小調査区の設定〉（第3・4図）

発掘調査区は、道路建設予定地内に約400mにわたり設定されている。調査面積約6575m²。調査区は、便宜上 I区・II区・III区・IV区の小調査区に分けている。原則的に府道牛滝貝塚線調査部をII区とし、その南側をI区、その北側をIII区、そして調査区の残り西側をIV区と呼称している。更に進入路の確保等の都合上、I区をIA・IB区に、II区をII-1～3A・II B-1～3区に、III区をIII A・III B・III C区に、IV区をIV A・IV B・IV C・IV D区に分けている。報告での記述はこれに従う。

遺構の実測および遺物の取り上げには、国土社標法による新平面直角座標第VI座標系をもとにした4×4mの区画を使用している。まず本遺跡の所在する「大C-3-16」の1/2500地形図を12等分し500×500mの区画を作り、さらにこれを25等分し100×100mの区画を用意する。最終的にこれを625等分成して4×4mの最小区画を設定している。これによると本調査区は「大C-3-16」の500m区画ではE・Fに、E・Fの100m区画においてはE05・E10・F06・F07・F12・F13・F18に位置する。



第3図 大阪府地域計画図の図割り



第4図 区割りと小調査区位置図 (1/2500)

〈調査の経過〉

調査はⅠ区から始め、Ⅲ区・Ⅳ区と進めた。次に、府道牛滝貝塚線が調査の終了したⅠ区とⅢ区に切り換えられた後にⅡ区の調査に入った。Ⅱ区の調査は府道の切り換え工事が2工程にわたる関係上、調査区をⅡ-1~3A・ⅡB-1~3区に分割し順次進めた。調査は全面発掘を基本としたが、埋蔵管の設置をみるⅡ区南辺、町道確保のためⅠA区西端およびⅢC区東端は隣接地の遺構検出状況を考慮した上で立会調査とした。調査区は構造物撤去時の搅乱が著しく、撤去物を埋めた擾乱坑が数多く存在していた。遺物包含層の残存率は低く、機械掘削が地山（基本層序第Ⅳ層）直上に及ぶ調査区もある。ⅣA・ⅣC区では遺構面の大半が消失し、Ⅱ区では現道の路盤工事による削平が著しく遺構検出面がⅠ・Ⅲ区遺構面より約15cm下っていた。しかし、掘立柱建物など遺構深度の深い類は検出されている。なお、Ⅱ区の一部とⅣB・ⅣD区では遺構の保存がはかられている。

〈遺構記号〉

本報では下記の遺構記号を用いる。

道路	OA	溝	OS
建物	OB	土器溜・瓦溜	OT
竪穴住居	OD	井戸	OW
土壙・石壙	OE	苑池	OY
柵・塀	OF	水田・畑	OZ
炉	OH	祭祀	OC
水利施設	OI	窯	OK
土坑	OO	池・沼	OL
ピット	OP	埋葬施設	OU
河川	OR	その他・不明	OX

第1表 遺構の種類と記号

〈調査の目的〉

- ①清見遺跡は、元興寺文化財研究所の分布調査に拠れば奈良時代～平安時代の遺物が多量に表採されており当該期の大集落の存在が予測されている。本調査区は遺跡の西縁部にあたるが、試掘調査により当該期の遺構がこの地まで拡がっていることが明らかにされている。従って、奈良時代～平安時代の遺構の検出とその実態の把握がひとつの目的になる。
- ②清見遺跡の位置する近木川右岸の低位段丘には条里地割が明瞭に遺存している。従って、条里地割に係わる地下遺構の検出とその施行時期の解明がひとつの目的になる。これは背景としての大規模土地開発がいつ始められたかを知る手掛りを得ようとするものである。

第4章 調査の結果

第1節 層序 (第5・6図 図版27・28)

今回の調査範囲は延長380mに及び、地表面の標高は西端でT.P.34.7m、東端でT.P.37.6mを測る。この間には3枚の微地形面が認められ、ⅢA区東端に約1.2mの段差をもつが、基本的な層位には変化が見られなかった。調査では、遺構面下にもトレンチを設定し基盤層である段丘疊層上面まで層位の把握を行った。その結果、基本的に4層に大別された。

第1層 近代～現代堆積層である。

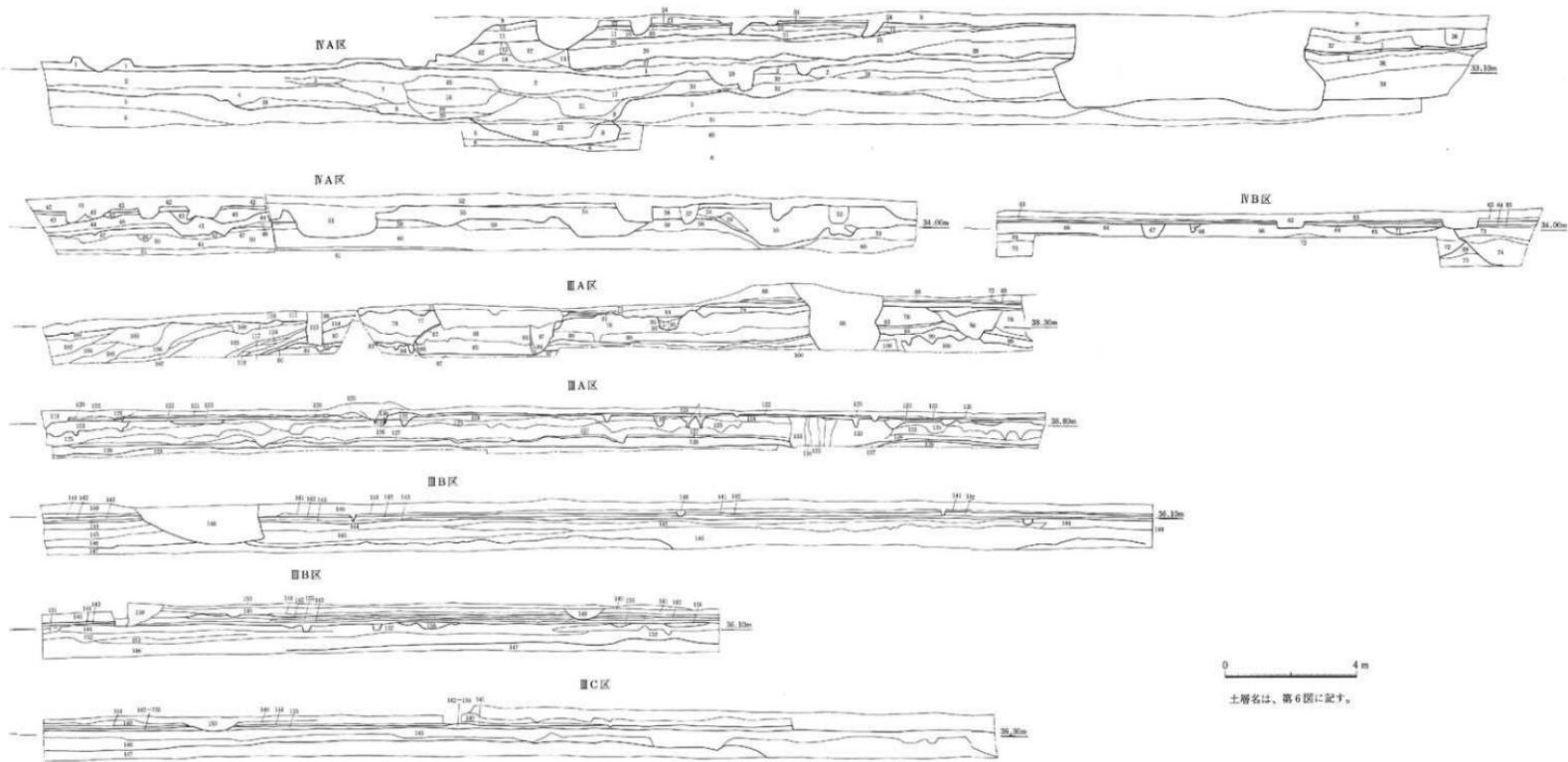
第I-1層 盛土や搅乱土で、厚さ50cmに及ぶ。

第I-2層 近、現代の水田耕土である。上層は現代の水田耕作土で暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2)から成り、厚さは一様に約20cmを測る。ⅣA、ⅣC区には認められない。この下に、断続的に厚さ1～5cmの灰黄色微砂質シルト(2.5Y6/2)があり、旧耕土の可能性が高いが時期は不明である。下層は現床土でにぶい黄褐色粘質シルト(10YR5/4)を呈し厚さ2～4cmと薄い。

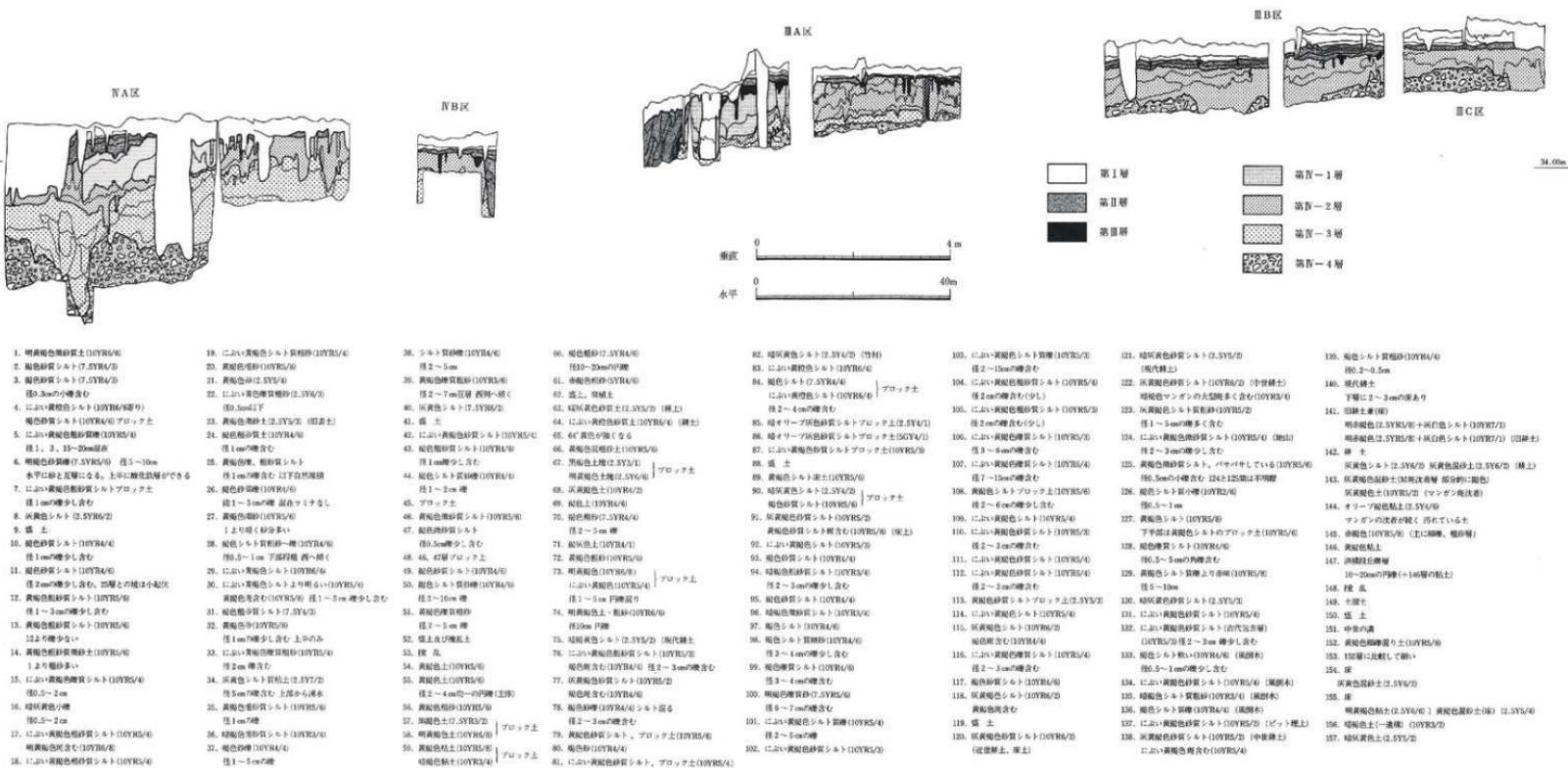
第II層 中～近世の堆積層である。ⅣD区西側を除いて概ね水平堆積をなし3層に細別できる。

第II-1層 暗灰黄色砂質シルト(10YR5/2)等である。黄褐色斑(2.5YR5/6)を多数含む他、マンガン細粒も若干見られる。厚さ5～20cmを測る。その直下には、床土様の厚さ約5cmのオリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/6)等が広がる。近、現代の耕土と同様の範囲に分布する。17世紀中葉に埋没したⅣD区617-OSを覆うことから近世耕作土の可能性が高い。

第II-2層 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2)等である。黄褐色斑(2.5Y5/4)を含むが第II-1層に比べて灰色味が強く、場所によっては粗砂を多く混入する。また、マンガン細粒を若干含む。厚さ5～10cmを測る。第II-1層より分布範囲が狭くⅣB区ではこの層を欠く。古代、中世の遺物を数多く含む。条里地割に該当する13世紀前半のⅠC区244-OSを削平し、また、15世紀前中葉のⅠA区1-OSを覆うことから、中世後期の耕作土と考えられる。その直下には、厚さ1～3cmの床土様の黄褐色斑(10YR8/5)を多量に含むにぶい黄橙色シルト(10YR6/3)等がある。これらの下には、マンガン粗粒が厚さ1



第5図 北盤断面図 (1/120)



第6図 北盤断面模式図(水平1/800、垂直1/800)

cm程度に密に集積するが、後世の耕作等により二次的に形成されたものと考えられる。

第II-3層 暗灰黄色シルト (2.5Y5/2) 等よりなる。I B, IV D区に於て、上記のマンガン斑集積層の直下に断続的に認められる。粗砂粒をほとんど含まず、第II-2層とは明瞭に区分できる。厚さ5~10cmを測り、地山である第IV層との界面は細かな起伏を持つ。13世紀代の条里溝に切られ、IV D区では古代の柱穴を覆っている。土質、色調等から耕土の可能性が高い。

第III層 平安時代の遺物包含層である。III A区のみに残存し、西側部分で厚さ5~15cmを測る。にぶい黄褐色粗砂質シルト (10YR5/3) 等で、褐色斑 (10YR4/4) を多量に含む。径2~3cmの礫を混入し、また、土器の小片をかなり含む。III A区西部の10世紀代の柱根痕埋土と共通するため、同様な時期を考えることができる。

第IV層 清見遺跡に於ける地山層である。無遺物の砂礫とシルトの互層で、4層に細別できる。

第IV-1層 地山最上部の砂礫層である。褐色 (10YR4/4) 等を呈す。礫径は2~3cmと比較的小さく、部分的に粗砂、シルトを介在させる。III A、I C区の西側、及びIV A区西半の2ヶ所に分布し、厚さ約1cmを測る。層の肩部はかなり傾斜を持つ。その他、I C区東半からI B区西半に於いても局地的に認められる。III A区ではこの層が10世紀代の遺構面となる。分布状況から旧河道の埋土と考えられ、IV A区の河川状遺構がその一つに該当する。

第IV-2層 上半部は黄褐色微砂質シルト (2.5Y5/4) で、厚さ5~20cmを測る。第IV-1層で切られる以外は全域に分布し遺構面を形成する。下半部は第IV-3層との間に、厚さ約30cmの黄灰色シルト質砂礫 (2.5Y5/1) 層が幅広くレンズ状に挟まる。

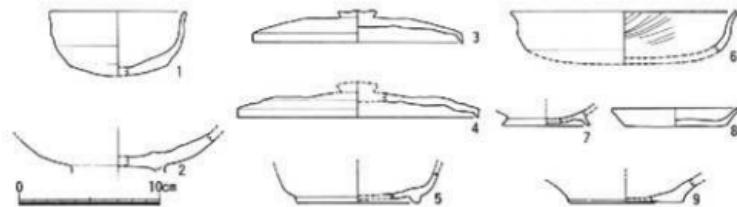
第IV-3層 最上部には厚さ15~30cmの褐色シルト (10YR4/4) があり、調査区全域に広がる。この上面には乾燥状態を示す縦方向の細かい亀裂が入る。下半部は明黄褐色シルト (10YR6/6) で、西側に傾斜する。IV D区西側では厚さ1.5mを測り、この部分には第IV-4層を切り込む旧河道が認められる。

第IV-4層 段丘礫層である。にぶい黄褐色粗砂質礫 (10YR5/4) 等で、礫径は15~30cmが主体となる。礫面はほぼ水平方向に揃い、薄くシルト層を挟み極めて堅く締まる。地下水の影響で一部赤褐色に酸化する。上面の標高はIV D区T.P.33.5m、I A区T.P.36.3mを測り、現地表に対応してIV区とそれ以東で段差を持つ。上面には谷状の落ちが数ヶ所認められる。

第III層出土遺物 (第7図 図版29・32)

(1～5、9、127) は須恵器である。(1) は杯身で底面は丸みを持ち回転ヘラ切り痕を残す。(2) は高台付壺の底部で内面に同心円状の叩き目を残す。(3、4) は杯蓋で、(3) は偏平で中央が突出する擬宝珠様つまみを付け、(4) は端面がZ字形に屈曲し天井部にやや難な回転ヘラケズリを施す。(5) は杯身で底部端に近く直立気味の高台を付ける。(9) は鉢の底部でヘラ切り痕を残す。(6、8、126) は土師器である。(6) は杯身で体部はS字状に屈曲し口縁端部を内側へ折り返す。内面は粗い放射状暗紋を巡らす。体部内外面はヨコナデ、底面はヘラ削りする。明赤褐色(2.5YR5/8)を呈し白色微砂粒を含む。(8) は皿で口縁部をなくした底部内外面に指押え痕を残し、体部を強くヨコナデする難な作りである。淡黄色(2.5Y8/3)を呈し径1mm以下の白色砂粒、赤色酸化粒を含む。(7、128) は黒色土器B類壺でハ字状に開く高い高台を付し内面をヘラ磨きする。

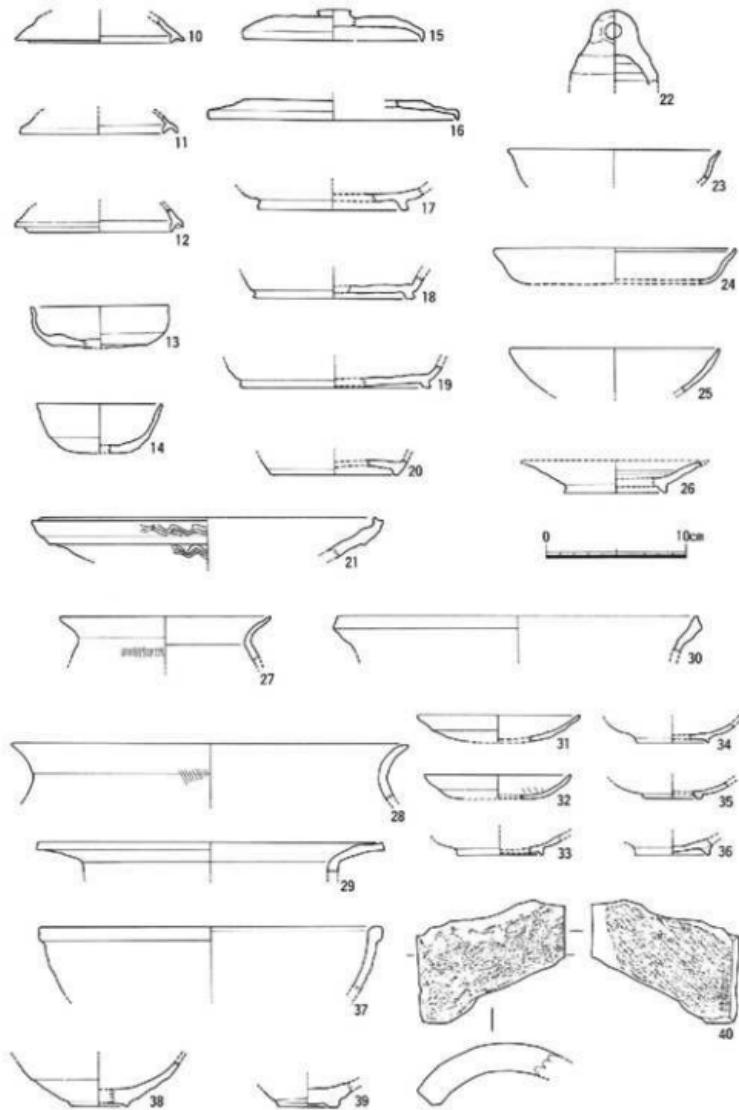
遺物の時期は(1) は陶邑編年III型式1段階で7世紀代、(3) は同IV型式2段階、(4、5) は同IV型式3段階、(6) は平城宮III～IV式で8世紀代に該当する。下限は、(7) は10世紀代、(8) はやや下がる可能性があるが、第III層には瓦器片を全く含まないことから11世紀以前であろう。



第7図 第III層出土土器 (1/4)

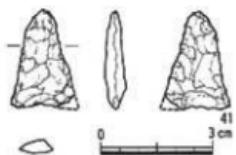
第II層出土遺物 (第8・9図 図版29～32)

出土地区は、IA区(38) IB区(17、20、26、30～32、39、40、117、118) IC区(23、27、33) IIIA区(16、36) IIIB区(25、34、119) IIIC区(18) IVA区(122、123、125) IVB区(13～15、19、24、121、124) IVD区(10～12、21、22、28、29) である。(10～22、30、122～125) は須恵器である。(10～12、15、16) は杯蓋である。(10、11) は復原口徑約10cmと小形でかえりは口縁端部より僅かに下に出る。(15、16) は端面を下方に屈曲させる形態で、(16) は天井部が平坦で端がZ字形に屈曲する。(13、14、17～



第8図 第II層出土土器 (1/4)

20、124) は杯身である。(13、14) は底面に回転ヘラ切り痕を残す。(17) は底部端よりやや内側にハ字状の高台を付し、底面は回転ヘラ削りを施す。(18、19) は底部端近くに外接する高台を付し、(18) は底面に回転ヘラ切り痕を残す。(20) は底部端に直立する低い高台を付す。(21) は甕で端面が断面三角形状に肥厚し、外面に低い凸帯と波状紋(4条/1.7cm)を巡らす。(22、123) は釣鐘形の瓶壺甕である。(125) は堤瓶の体部で外面をカキ目調整し、内面は同心円状叩き目を回転ナデで擦り消す。(122) は丸底の壺であろう。(23~24、27~29、121) は土器である。(23) は杯身、皿で体部がS字状に屈曲し端面は内側へ折り返される。摩滅が著しく調整不明である。(23) は明赤褐色(5YR5/8)、(24) は浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈し、胎土に径1mmの白、黒色砂粒を含む。(27、28) は甕でく字状に外反する口縁を持つ。(27、28) は体部外面をやや上がりハケ調整口縁部をヨコナデする。(29) は口縁内面を横ハケ調整する。(27) は橙色(5YR5/6)、(28) は浅黄橙色(7.5YR8/3)、(29) は橙色(5YR6/8)を呈し、胎土に径0.5~1mmの白色砂粒、赤色酸化粒を含む。(25) は黒色土器B類掩で口縁部直下に浅い沈線を巡らす。内面は密にヘラ磨きし外面はヘラ削りの後ナデ、下半部には指押え痕を見る。浅黄橙色(10YR8/3)を呈し径2mmの白色砂粒を含む。(26) は縁軸の皿で内面に段を持ち、高台は断面三角形で外縁が接地する。須恵質で灰白色(N4/0)の精良な胎土をもつ。(30) は須恵質鉢で、口縁が肥厚し内傾する面が灰色(N6/0)を呈す。(31~36、119) は瓦器である。(31、32) は皿で、内面の暗紋は摩滅で不明である。(33~36) は壇底部で低い断面三角ないし逆台形の高台を付す。(37、38、117) は陶器である。(37) は鉢で口縁上端が断面方形に肥厚する。体部外面に白泥で緩やかな波状紋を描く。断面は赤色(8.5Y8/2)、軸は内外面に塗布され灰白色(8.5Y8/2)を呈す。(117) も同様の胎土と軸をもち内外面に白泥で波状紋を描く。(37~39) は低い削り出し高台を付ける。(38) は断面橙色(5YR6/6)で体部下半を除いてオリーブ色(5Y5/6)の軸を厚く塗布する。(39) は断面暗赤色(10YR3/6)のやや粗放な胎土に、内面にオリーブ灰色(10Y5/2)の軸を塗布し見込みの4ヶ所にトチ跡がある。(40) は瓦質の軒丸瓦で内面に布目压痕、外面に離れ砂が残る。他に輪の羽口がある。1つは厚さ2.5cmで端面は平坦で、外面は融解する。内面は橙色(5YR7/6)で軟質、径6mmの白色粒を含む。いま1つは先端が細く、若干加熱を受ける。にぶ



第9図 第II層出土石器(1/2) い橙色(7.5YR7/4)を呈し径0.5mmの白、褐色砂粒を含む。

若干の鉄滓がある。

(41) は凹基無茎式の石鎧で、基部を欠くが現存長26.3mm、現存幅17.2mm、厚さ5.1mm、重さ1.89gを測る。剥離は粗雑で、表面がかなり風化する。サヌカイト製である。

時期の判明する遺物は、古墳時代後期から近世まで幅を持つ。6世紀代は(21、122、125)が挙げられる。7世紀代は(10~14)の須恵器がある。この時期の遺物はIVB、IVD区に限られる。8世紀代は(15~20、23、24)が挙げられる。9、10世紀代は(25、26)が該当し、(26)の縁軸は高台の形態から滋賀県産と推定される。中世では(31~36)の瓦器が13世紀代の特徴を備え、(30)も13~14世紀初頭の東播磨産である。この他にもIA、IB区で15世紀代の瓦質羽釜片が出土している。近世では(37、117)の唐津焼が該当する。第II層に各時期の遺物を見るのは、先行する遺構面を大幅に削平して形成された結果と考えられる。

第2節 小調査区の概要（付図1、2、3）

IA区（図版2）遺構面はT.P.36.7mを測る。主要遺構は、中世後期の条里地割りに伴う坪界溝(1-OS)、近世期の小溝群であり、他に時期不明の柱穴が散在する。この内、1-OSは層位関係より基本層序第II-2層の上限を決める資料になっている。

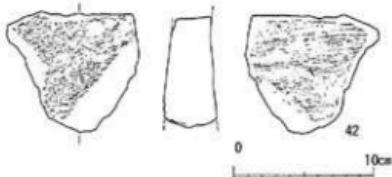
IB区（図版3）この調査区は厚い盛り土に覆われている。遺構面はT.P.36.3~36.2mを測る。数カ所に大きな搅乱坑があったが、第II層は良好に残存する。主要な遺構は、中世期の条里地割りに伴う坪境の溝と坪の中を区画する小溝群である。また、性格不明の中世期の土坑があった。散在するピット群は建物にはならず、杭跡などの可能性が高い。

IC区（図版5）搅乱坑により遺構の遺存状況が不良である。遺構面はT.P.36.2~35.7mを測り、IB区より西方に傾斜している。主要遺構には、古代の掘立柱建物2棟、土坑2基、掘立柱列、中世前期の区画溝4条があり、他に近世期の小溝や時期不明の柱穴が散在する。上記の内、244-OSなどの中世前期の区画溝は当地における大規模土地開発の初源を知り得る資料である。

IIA区（図版9）II区は現道の下にあたるために、すでに包含層は失われており、遺構も非常に浅いことから遺構面をも削平されている地区である。遺構はほぼ中央付近から南北方向にかけて約60を検出した。各遺構の内訳は掘立柱建物が5棟、土坑1基、溝1条、その他はピットである。遺構の時期は遺物が少ないと正確には把握できないが、奈良時代から平安時代前期と考えられる。

II B - 1 ~ 3 区（図版9）II区は現道の下にあたるために、すでに包含層は失われており、遺構も非常に浅いことから遺構面をも削平されている地区である。しかし、ほぼ全域にわたって約70を検出した。各遺構の内訳は掘立柱建物が1棟、土坑2基、溝1条、その他はピットである。遺構の時期は遺物が少ないため正確には把握できないが、奈良時代から平安時代と考えられる。

III A 区（図版10 図版13）遺構面は東端でT.P.35.5m、西端でT.P.34.9mを測り中央部付近で急に落ちる。遺構は東西に別れ、東側では古代の建物1棟と溝、時期不明の柱穴群、西側では平安時代の建物1棟と同時期の柱穴群、土坑などが



第10図 375-OO出土瓦 (1/4)

あった。西端の近世の落込みはIV B区と同様な大溝になる可能性がある。また、近代の木溜（375-OO）から奈良時代の軒丸瓦（42）と、近代の磁器片が出土する。

III B 区（図版17）遺構面はT.P.36.2m前後を測る。主要遺構には、中世前期の区画溝など溝6条、土坑1基、柱穴群などがある。柱穴群は調査区の西端付近で途ぎれる。

III C 区（図版18）遺構面はT.P.36.4m前後を測り、I区同様に西へ傾斜している。調査区の東半は擾乱坑により遺構面の大半が消失している。主要遺構にIII B区から伸びる中世期の柱穴群がある。

IV A 区（図版19）この調査区は工場跡地のため隨所に大きな擾乱坑があり、遺構面に相当する面も相当荒されていた。やや残りの良い東端部は、T.P.34.2mを測り、中世期の柱列があった。西半部は特に擾乱が著しいため遺物の確認をかねて地山最上部の第IV-1層（砂礫層）を掘り下げた。その結果、遺物は出土しなかったが第IV-2層上面にて自然道路と砂礫の詰まった土坑状の落込みを多数検出した。そして第IV-1層自体がIV A区中央付近を肩にする大きな旧河道の埋土であることが判明した。この層はIV C区にはほとんど無く河道は南西から北東に流れ、幅30m以上、深さ1.3m以上と考えられる。肩部はT.P.34.5m、底面はT.P.33.1mを測る。調査区のすぐ西側の清見から麻生中へ流れる小川はその後身になるかも知れない。上記の土坑の1つ527-OOは、楕円形で長さ2.5m、幅1.7m、深さ0.4mを測り、黄褐色シルト質礫（10YR5/6）を埋土とする。風倒木の可能性がある。なお包含層からは6世紀代の遺物をみる。

IV B 区（図版20）遺構面はT.P.34.1mを測る。調査区が狭いにもかかわらず、古代の掘

立柱建物4棟、土坑2基、近世期の溝1条、井戸1基、土坑2基が検出されている。他に、近・現代の土坑や井戸(600・615・OW)がある。上記の内、近世期617-OSは層位関係より基本層序第II-1層の上限を決定する遺構になる。

IVC区 掘乱が著しく、遺物包含層は完全に消失し、遺構面もかなりの削平を受けている。遺構、遺物は皆無である。

IVD区(図版25) 遺構面は現代の水路で南北に分断される。南側はT.P.34.9m、北側はT.P.34.5mを測る。狭い調査区であるが、当遺跡で唯一の飛鳥時代に遡る落込み状土坑が確認された。他には古代の建物1棟、若干の柱穴群、ほぼ南北に延びる中近世の小溝群がある。

第3節 飛鳥時代

〈概況〉 IVD区に於て不定形の土坑が1基検出されている。

土坑

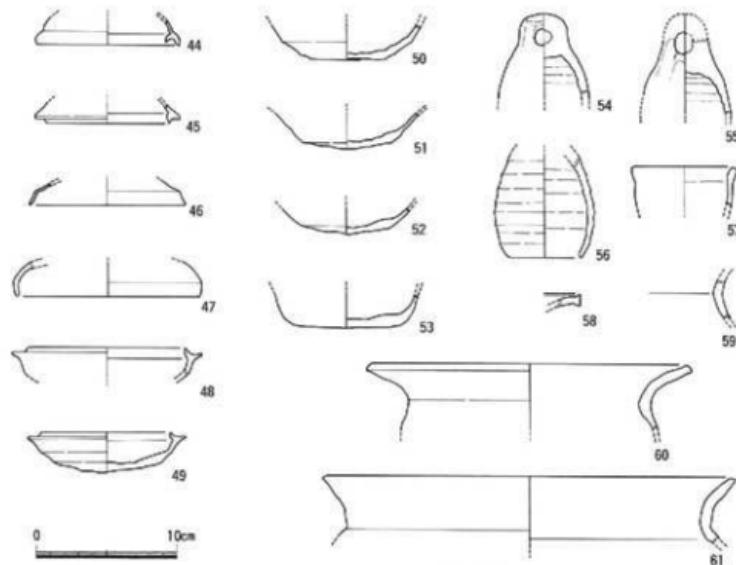
637-OO(第11・12・13図 図版26・29・30・37)

IVD区南側に位置する。平面が不定形を呈する落込み状の土坑である。北端は現代の水路に切られ、南側は調査区外へ続く。北側で幅が広がると共に深くなる。現状で東西4.4m、南北4.9m、深さ0.28mを測る。断面は浅いU字形を呈す。底面には凹凸が認められ、特に西側が東西1.5m幅で溝状にくぼみ、その東には梢円形の深い落込みがある。埋土は2層に別けることができるが、その差は僅かである。上層はにぶい黄褐色シルト(10YR5/3)、下層は灰黄褐色シルト(10YR5/2)で暗褐色斑(10YR3/3)を含む。遺物は両方に含まれるがやや下層に多く、ほとんどが小片である。遺構の性格は不明である。なお、638-OP、640-OPは、この遺構が埋まった後作られる。

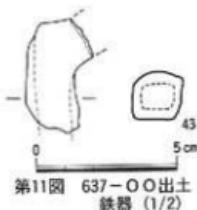
出土遺物は土師器106片、須恵器52片、鉄器1片を数える。(44~56、58、167)は須恵器である。(44~47、167)は杯蓋である。(44、45)は内面にかえりが付く形態である。かえりは口縁端部とほぼ同じ長さに延びる。(167)は口縁端よりやや内側に形態化したかえりを持つ。焼成不良である。(46、47)は、かえりの無い形態である。(48、49)は杯身で、立ち上がりの上端は口縁部より上方に出る。(48)は底面を回転ヘラ削りする。復原口径9~11cmを測る。(53)は平底で、他は若干丸みを持つ。(51~53)は外面を回転ヘラ削りし、(49)は回転ヘラ切り痕を残す。(54~56)は飯蛸壺で、肩のあまり張らない釣鐘形を呈す。(55、56)は体部に回転ナデによる稜線が明瞭である。(55)はやや

焼成不良である。(58)は壺口縁で端面を上下に拡張する。(57、59~61、168、169)は土師器である。(56)は小形の鉢で、口縁内面が帯状に肥厚する。灰白色(5Y8/2)を呈し精良な胎土をもつ。(59)は甕と考えられる小片で、体部外面にやや右上がりのヘラ描き沈線を1条施す。外面

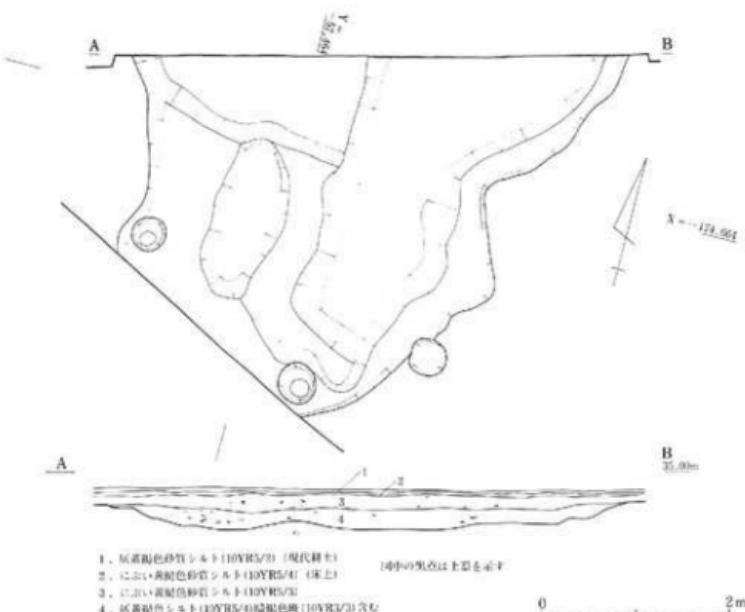
は縦に刷毛調整し、内面は横にヘラ削りする。赤色(10YR5/6)で胎土には径1mm以下の白色砂粒を多く含む。(60、61)は甕である。頸部は緩やかにくの字形を描いて外反し端面は平坦になり内傾する。摩滅のため調査は不明である。(60)は橙色(5YR6/8)、(61)は灰色(5Y5/1)を呈し両者共に径2~4mmの白色砂粒を若干含む。焼成は軟質である。(168、169)は同一個体と推定される瓶の小片であろう。(169)は厚さ0.8cmを測り、内外面に粗い刷毛目を施す。(168)は厚さ1.5cmのやや内湾する破片で、内面に粗い刷毛目、外面には指押え痕を残す。両者共にぶい橙色(7.5YR5/4)を呈す。鉄器(43)は鍛が著しく両端を欠損するが、一辺1.3cm、現存長4cmを測る。断面方形を呈し、先端がL字形に曲がり、釘の可能性が高い。



第12図 637-OO出土土器 (1/4)



第11図 637-OO出土
鐵器 (1/2)



第13図 637-OO平面・断面図 (1/60)

遺物の時期は、(46~49)は陶邑編年II型式6段階に、(44、45)は同III型式1段階に該当し、7世紀前～中葉の年代が与えられる。(48~52)も同様であろう。(167)は同III型式第2～3段階の可能性が高く、7世紀後葉に下がる。しかし、より明らかに時期の下がる遺物を全く見ないため、遺構の時期を7世紀代に置くことができる。なお当調査区の第II層出土の遺物中にはこの遺構からの遊離品を含むと考えられる。

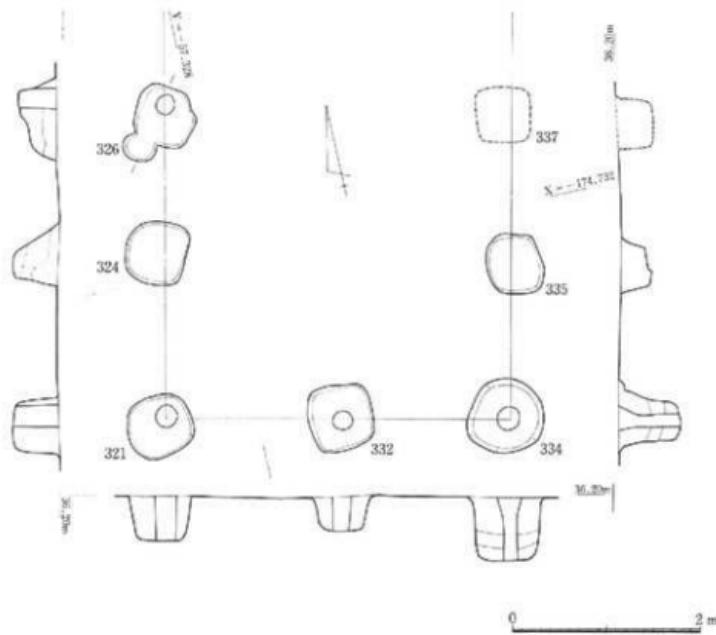
第4節 奈良時代～平安時代

〈概況〉 II B区からIV B区に分布し、種類別には、掘立柱建物15棟、柱穴群3箇所、土坑9基、溝1条、掘立柱列1列がある。遺物包含層の大半は消失しているが、III A区にはかろうじて平安時代の包含層（基本層序第III層）が残存している。出土遺物より時期の確定できる遺構は少なく、上記の内には埋土の共通性や遺構の重複関係により当該期に含めたものもある。傾向として奈良時代に属する遺構は少なく、大半は平安時代と推定される。

掘立柱建物

1001-OB (第14・15図 図版5)

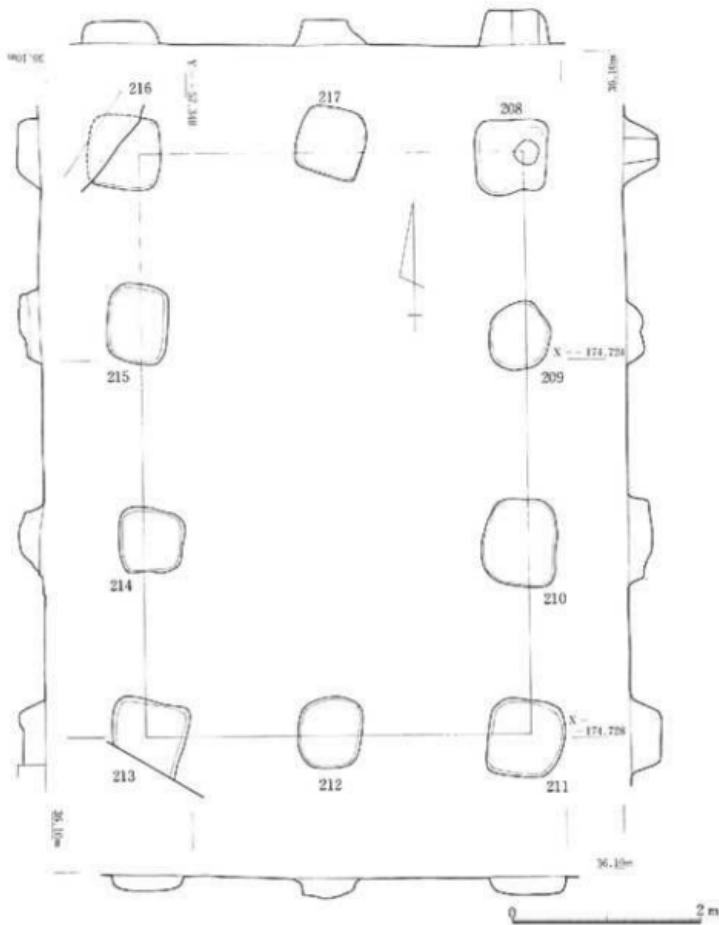
I C 区東端で検出した。桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物で、棟方向は真北より東へ13度振れている。北への続きはII B 区で検出されるとの予測があったが、その範囲が埋管設置による搅乱を受けており結果的には未検出に終わり全容を知ることはできなかった。桁行全長は3.30m以上で柱間寸法は1.65m等間を、梁行全長は3.64mで柱間寸法は1.82m等間を計測する。柱権形は一辺60~80cmを測る隅丸方形で、深さは30~70cmを測る。柱根跡は326・321・332・334-OPで観察され、その径は25cm前後を計測する。遺物は柱権形埋土より須恵器・土師器破片が検出されている。器形の判明するのは須恵器塊 第14図 1001-O B出土土器 (1/4) (62) のみである。径18cmを測り、10世紀代の資料と推定される。



第15図 1001-O B平面・断面図 (1/60)

1002-OB (第16・17図 図版6・33)

I C区1001-OBの西約15mにて検出した。桁行3間(6.2m)、梁行2間(4m)の南北棟据立柱建物である。柱根跡は北妻柱列の北東隅柱(208-OP)にしか確認されていないが、柱間寸法は桁行・梁行とも概略数値で2mと算出される。柱掘形は隅丸方形で、一



第16図 1002-O B 平面・断面図 (1/60)

辺80cm前後、深さ30~40cmを測る。208-OPの柱根跡は径25cmを計測する。

遺物は各柱掘形埋土より、須恵器杯、土師器杯・皿・甕などの破片が検出されているが、國化資料は下記の4点である。須恵器杯(63)は217-OP出土。同杯(64)は213-OP出土。土師器高杯口

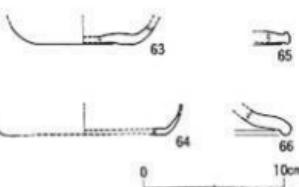
縁端部(65)と脚端部(66)は208-OP出土。上記の内、時期比定の可能な資料は高杯脚端部(66)で、端部が内方に丸く肥厚することから平城京S E650B~平安京左兵衛府SD1に比定しうる。

この資料は掘形埋土内出土ではあるが、これをもって本建物の時期を先の遺物により9世紀後半~10世紀中頃とみて大過ないと考えられる。

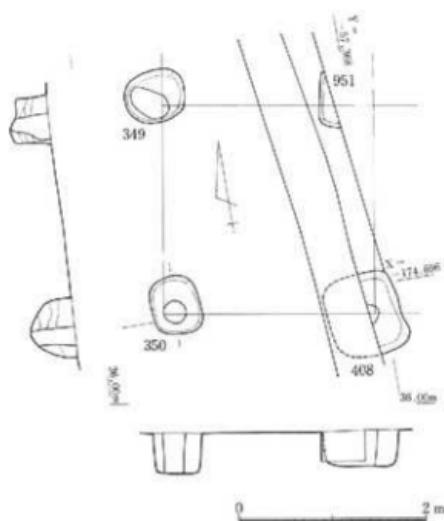
1003-OB (第18図 図版14)

III A区の東端に位置する。北西隅柱を含む4個の柱穴を検出した。大半は調査範囲の東側に続く。間取り1間以上の建物に復原した場合、その中軸線上にも柱穴(408-OP)が位置するため、総柱建物ないし庇付建物の可能性が高い。南北の柱筋は真北より東へ9度傾く。柱間寸法は2.1~2.2mを測る。柱根跡は径0.25m、掘形は隅円方形で1辺が0.5~0.8m、深さ0.45~0.55mを測る。408-OPの掘形はやや大形である。349-OPは柱根抜取り穴を持つ。埋土は、柱根跡が褐色砂質シルト、掘形はにぶい黄褐色砂質シルトで3層に分かれる。

遺物は、349-OP、350-OPから出土し、土師器11片、須恵器1片を数える。いずれも細片のためその時期を明らかにしない。遺構については、掘形の形態、柱筋方向から古代



第17図 1002-OB出土土器(1/4)



第18図 1003-OB平面・断面図(1/60)

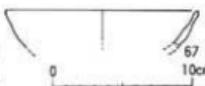
に遡るものと考えられる。

1004-OB (第19・20図 図版16・34)

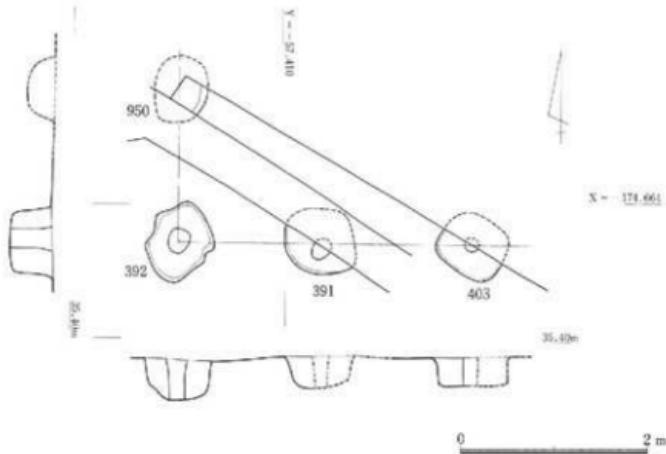
III A区の西側に位置する。南西隅柱を含む3個の柱穴を検出した。大半が調査区の北側へ続くため、棟方向は不明である。南北柱筋方向は、真北より1度西へ振る。柱間寸法は、1.5~1.6mを測る。柱根跡は径0.15~0.25m、掘形は圓円形を呈し一辺約0.65~0.7m、深さ0.45~0.9mを測る。埋土は、柱根跡が褐色砂質シルト、掘形は上層が黄褐色、下層は褐色砂質シルトである。

出土遺物は、土師器13片、須恵器8片、黒色土器1片を数える。

(67) は392-OPから出土した須恵器の壺口縁部である。口縁端面は丸く、下をヨコナデによりややくぼます。復原口径13.8cmをはかる。黒色土器は392-OP上部から出土しB類の細片である。いずれも細かい時期は明かでないが、前者は縫窓産と推定される。從って遺構は10世紀代である可能性が高い。



第19図 1004-O B
出土土器 (1/4)



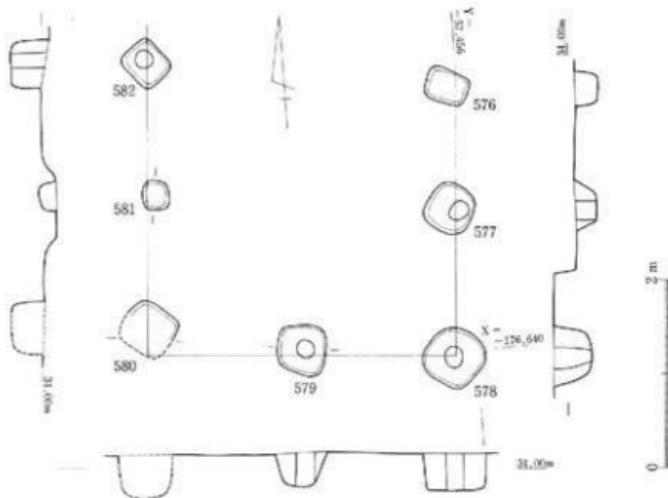
第20図 1004-O B平面・断面図 (1/60)

1005-OB (第21図 図版21)

NB区東半で検出した。桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物で、棟方向は真北より東へ4度振れている。建物の南への続きは617-OSに切られて不明である。梁行全長は柱根跡の残る西1間 (1.58m) をもって復元すると3.16mになる。桁行の柱間寸法は柱根跡の

残る東柱列北1間で1.56mを実測し、概略数値では梁間のそれと等しい数値を示す。柱掘形は隅丸方形を呈するが規模は不均一で、一边30~60cm、深さ20~40cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕はみられず、柱根跡の観察される場合が多い(577・578・579・582-OP)。柱根跡径は概ね20cmを計測する。

遺物は未検出で直接的な時期の比定は困難だが、棟方向の一致から西約5mに位置する1008-OBと同時期と推定される。東隣りに位置する1006-OBとは、本建物の北妻北西隅柱が約40cmと接近していることから同時併存の可能性は低い。



第21図 1005-OB平面・断面図 (1/60)

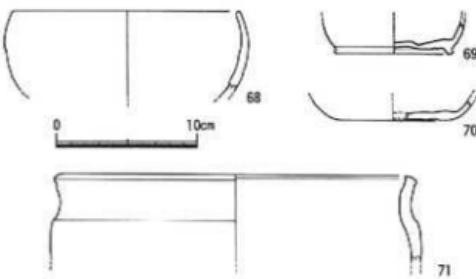
1006-OB (第22・23図 図版21・35)

IV B区東半で検出した。桁行2間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物である。北への続きは調査区外にあたり全容は不明である。柱の抜き取りが著しく柱間寸法は計測不可能であるが、柱掘形の配置関係より2m前後と推定される。従って、桁行全長4m以上、梁行全長4mと推定される。柱の抜き取り痕跡は、570・572・573-OPにみられる。571・574-OPには柱根跡が観察され、これに拠ると柱掘形は一边20~60cmの隅丸長方形で深さ10~30cmを測り、柱根跡径は15cm前後を計測する。

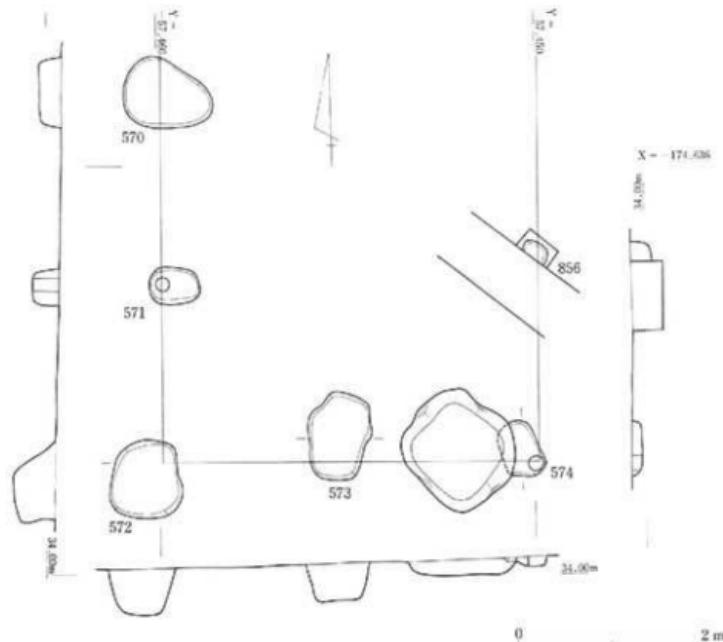
遺物は柱抜き取り穴埋土より須恵器・土師器の破片が検出されている。須恵器鉢(68)

は572-OP出土で、鉄鉢形を呈し口径16cmを測る。須恵器杯(70)は573-OP出土で、ヘラ切末調整の底部である。須恵器杯(69)も同じく573-OPで、底端部にハの字形に開く高台が付く。須恵器鉢(71)も同じく573-OP出土で、口径24cmを測る大形品で肩部には張りがなく口縁部が直立気味に外反する。

上記の柱抜き取り穴埋土出土の上器は9世紀前半～中頃に収まり、これをもって建物の時期とすることができよう。



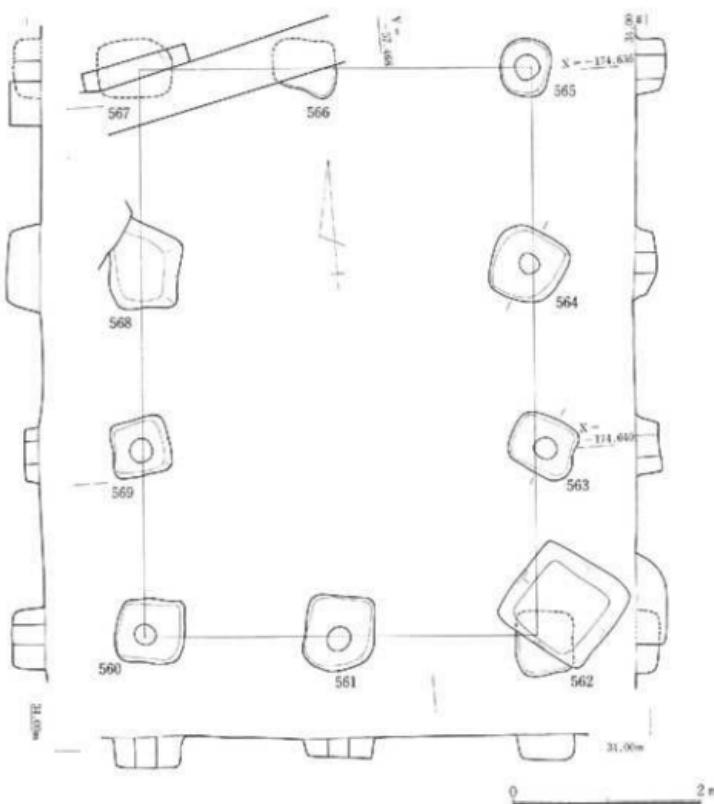
第22図 100.6-OB出土土器 (1/4)



第23図 100.6-OB平面・断面図 (1/60)

1007-OB (第24・25図 図版22・35)

NB区の西半で検出した。桁行3間、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ4度振れている。梁行全長は柱根跡の残る南妻柱列西1間(2.05m)を基準にすると4.10mになる。桁行全長は西柱列の柱間寸法を概略数値で2m等間と見做すと約6mと算出される。柱掘形は、一辺55~80cm、深さ15~30cmを測る。柱根跡は560・561・563・564・565・569-OPにみられ、その径は20cm前後を計測する。568-OPは形状からして柱抜き取り痕と推定される。



第24図 1007-O B 平面・断面図 (1/60)

遺物は各柱穴掘形より須恵器・土師器の細片が検出されているが、時期の知り得る資料は下記の須恵器杯の2点である。

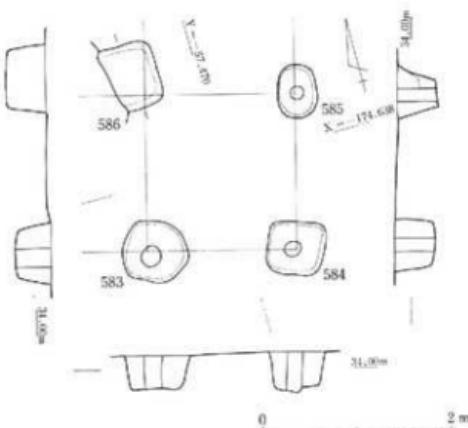
杯(72)は565-OP出土で、口径11cmを

第25図 1007-OB出土土器(1/4)

測り底部はへラ切り未調整である。杯(73)は562-OPから出土しており、底部はへラ切り未調整である。この資料に拠ると建物の時期は陶邑編年第III型式1~2段階に比定しうるが、須恵器杯が細片でなつかつ柱掘形埋上である点を考慮し、ここでは出土遺物の時期を建物の上限としておく。なお、後述の1009-OBよりも近接する時期の須恵器が検出されている。

1008-OB (第26図 図版22)

NB西半で検出した。1007-O Bと重複する掘立柱建物で、西への続きは654-OSに切られ北への続きは調査区外にあたり全容は不明である。現状では総柱建物の西南隅を検出したことになる。棟方向は真北より東へ13度振れている。柱間寸法は柱根跡の観察される583・584-OP間で1.5m、584・585-OP間で1.6mを測る。柱掘形は一辺40~60cmを測る隅丸方形で、深さは40cm前後を測る。柱根跡径は15~20cmを計測する。

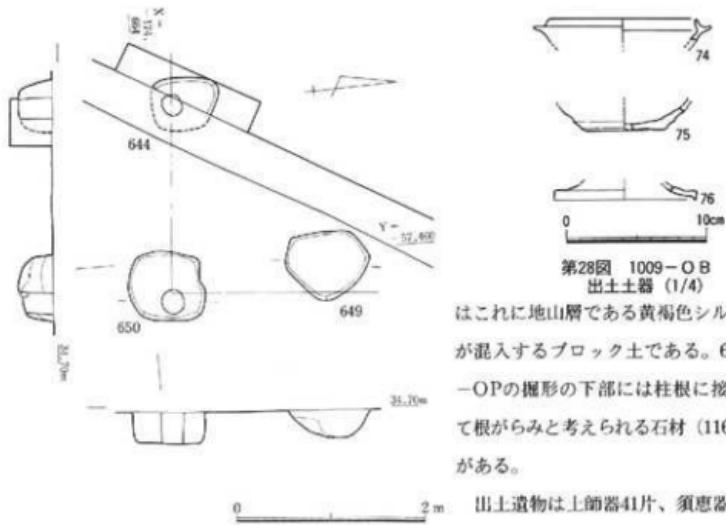


第26図 1008-OB平面・断面図(1/60)

遺物は未検出だが、棟方向の一一致を重視すればIC区1001-OBと同時期かもしれない。

1009-OB (第27・28図 図版30・36)

WD区東端に位置する。北西隅柱を含む柱穴3個を検出したが大半は調査区外へ続く。柱筋は真北より5度西へ振る。柱筋は直角にはならず、別の形の建物になる可能性がある。柱間寸法は1.6、2.1mを測る。柱根跡は径0.2~0.25m、掘形は一辺0.7~0.8m、深さ0.3~0.35mを測る。掘形は隅円方形である。649-OPは柱根の抜取り穴がある。埋土は、柱根跡が、にぶい黄褐色シルトで炭粒を含み、掘形は、上下層はにぶい黄褐色シルト、中層



第27図 1009-OB 平面・断面図 (1/60)

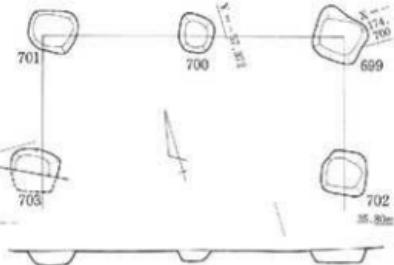
164・650-OPから(74・75・160・165)が出土する。(74～76)は須恵器である。(74)はかえりを持つ杯身で、復原径10.5cmを測る。(75)は底面にヘラ切り痕を残す。(76)は高杯の脚の端部で下方に拡張する。(160・164・165)は土師器である。(165)は甌の頭部と考えられ内外面に細かい刷毛目を施す。(116)は石材で、長さ21cm、幅11.3cm、厚さ7.6cmの方柱状を呈す。上面と短側面は平滑な面をなし若干の擦り痕を留める。それ以外の面は粗く打ち欠いた跡を見る。

転用材の可能性がある。礫質砂岩製である。

図示遺物は陶邑編年II型式6段階で
7世紀前半を示す。しかし近接して7
世紀の637-OOがあり遺物の混入を
招き安いことを配慮して遺構の上限と
するにとどめる。

1010-OB (第29図 図版10)

II A-1区の東端で検出した。桁行



第28図 1009-OB
出土土器 (1/4)

はこれに地山層である黄褐色シルト
が混入するブロック土である。650
-OPの掘形の下部には柱根に接し
て根がらみと考えられる石材(116)
がある。

出土遺物は土師器41片、須恵器14
片を数える。649-OPから(76・
164)、650-OPから(74・75・160・165)

第29図 1010-OB 平面・断面図 (1/60)

1間以上、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ5度振れている。建物の南への続きは不明である。梁行全長は3.2mになる。柱間寸法は桁行、梁行ともに1.60m程度である。柱掘形は隅丸方形を呈するが規模は不均一で、一边30~40cm、深さ10~15cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

遺物は未検出である。したがって、正確な時期は不明である。

1011-OB (第30図 図版10)

II A 区の1010-OBの東方約

10mで検出した。2間以上×2

間以上の掘立柱建物で棟方向は

真北より東へ8度振れている。

建物の南への続きは不明である。

桁行、梁行の区別はつかない。

したがって南北、東西棟かは不明である。

柱間寸法は1.9~2.0

mである。柱掘形は隅丸方形を

呈するが規模は不均一で、一边

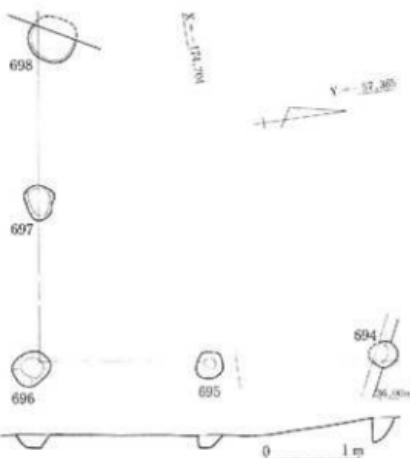
30~40cm、深さ10~15cmを測る。

柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕

は認められない。

遺物は未検出である。したがって、正確な時期は不明である。

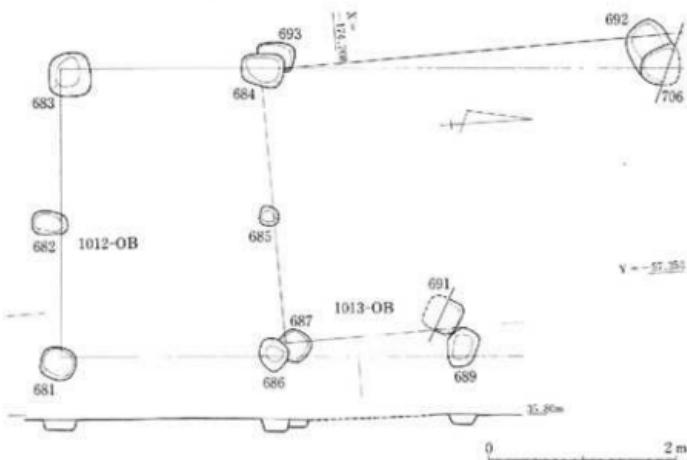
1012-OB (第31図 図版11・33)



第30図 1011-OB 平面・断面図 (1/60)

II A-2区の1011-OBの東方約10mで検出した。桁行3間以上、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ3度振れている。建物の北への続きは不明である。梁行全長は3.2mになる。柱間寸法は桁行が2.2~2.4m、梁行が1.60mである。柱掘形は隅丸方形を呈するが規模は不均一で、一边30~40cm、深さ10~15cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

遺物は681-OPから土師器2点、黒色土器(内面黒色)1点、682-OPから土師器1点、683-OPから須恵器1点、土師器1点が出土したが、いずれも細片のため器形、時期を決定するのは困難である。



第31図 1012・1013-OB 平面・断面図 (1/60)

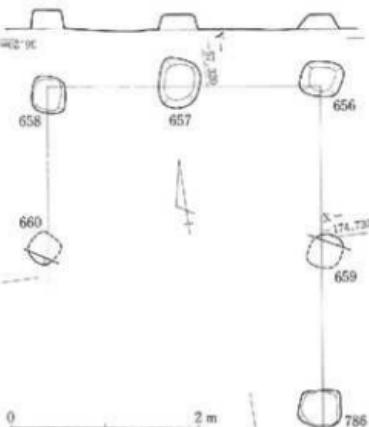
1013-OB (第31図 図版11)

II A-2区の1012-OBと重複して検出した。桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より西へ1度振れている。建物の北への続きは不明である。梁行全長は3.20mになる。柱間寸法は桁行が約2m、梁行が1.6~1.8mである。柱掘形は隅丸方形と円形とがある。柱穴の規模は隅丸方形のものが一辺30cm程度、円形のものが直径約20cm、深さはいずれも10cm程度である。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

出土遺物が認められないので、正確な時期を決定できないが、柱穴の切り合関係から1012-OBが新しく、1013-OBが古いと位置づけられる。なお、棟方向は後述の掘立柱列1021-OFと同一である。

1014-OB (第32図 図版11)

II A-3区の東方で検出した。桁行2間



第32図 1014-OB 平面・断面図 (1/60)

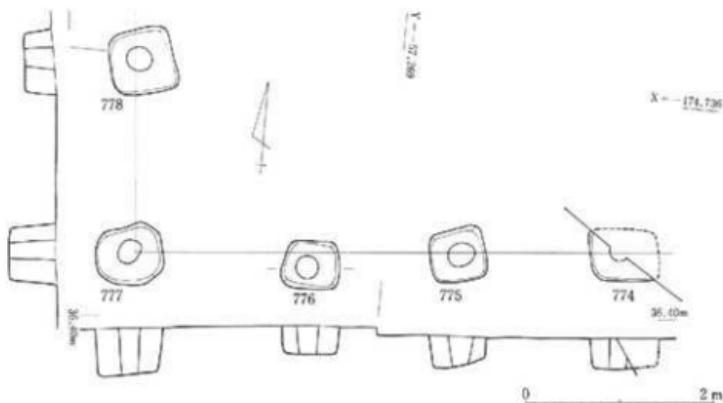
以上、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ6度振れている。建物の南への続きは不明である。梁行全長は2.8mになる。柱間寸法は桁行が2.4m、梁行が1.8mである。柱掘形は隅丸方形を呈するが、規模は不均一で、一边40~50cm、深さ20cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

遺物は656-OPから土師器の變体部片が1点出土したが、細片のため時期は決定できない。

1015-OB (第33図 図版12・33)

II B-1区の西方、1014-OBの西方約20mで検出した。II区で検出した6棟の建物中で最も大型である。建物の角の部分のみを検出したために南北、東西棟どちらとも決め難いが、東西棟の建物とすれば桁行3間以上、梁行1間以上の掘立柱建物で棟方向は真北より西へ7度振れている。建物の北への続きは不明である。柱間寸法は桁行が1.85、1.65、1.7m、梁行は2.0mとばらつきが認められる。柱掘形は隅丸方形を呈するが、規模は不均一で、一边50~60cm、深さ30~50cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕は認められない。柱痕はいずれも柱掘方のはば中央にあり、直径20cm程度である。

遺物は775-OPから土師器4点、777-OPから土師器4点、778-OPから土師器2点、須恵器1点が出土したが、いずれも細片のため器形、時期は不明である。



第33図 1015-OB 平面・断面図 (1/60)

III A区西部柱穴群（第34・35図 図版16・29・34）

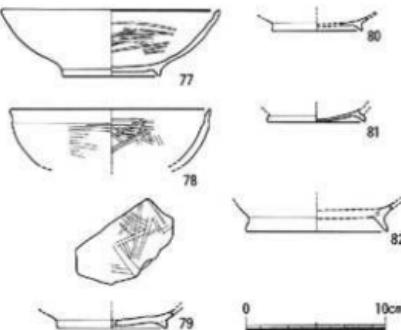
III A区の西半部に位置する。東西、南北約10mの範囲に分布する建物に復原し得ない49個の柱穴群を総称する。西側は、近世、近代の遺構で切られる。掘形が隅円方形で1辺が約0.7mを測る大形のものと円ないし、楕円形で径0.3m前後のものに大別できる。埋土は褐色ないし暗褐色シルトで構成される。

遺物は21個の柱穴から出土し、土師器、須恵器、黒色土器がある。黒色土器は北側の遺構に多い。(77)は406-OP、(78・81)は405-OP、(79・82)は386-OP、(80)は396-OP出土である。図示した遺物は全て黒色土器である。(77~79・81)はA類、(80、82)はB類である。(77)は復原口径15.4cm、器高4.7cmを測る。口縁内面にヨコナデによる段を持ち上端に浅い沈線を巡らす。高台は、断面三角形でハ字形に開く。内面はナデの後やや雑な暗紋を巡らす。外面は摩滅が著しいが指押え痕を僅かに残す。明赤褐色(2.5YR5/8)を呈す。(78)は復原口径14.0cmを測る。口縁端面はやや外反し、内面に痕跡状の沈線を巡らす。外面は指押さえの後ヘラ磨きする。橙色(5 YR6/6)を呈す。(79~81)の高台は(77)と同型で、(82)がやや大振りである。遺物の時期は(77)は森村編年3期に該当し10世紀初頭の年代が与えられる。他のものについても10世紀前半から中頃に納まるであろう。

III A区東部柱穴群（第36図 図版13）

III A区の東半部に位置する。東西、南北13mの範囲に分布する建物に復原し得ない34個の柱穴を総称する。規模が径0.2~0.3mで平面円形を呈するものが大多数を占める。これと径0.4m前後のやや大形のもの(355-OP、358-OP、357-OP)には柱根跡が見られるものが多い。埋土はにぶい黄褐色ないし灰黄褐色を呈す。楕円形の373-OP、隅円方形の390-OPは、これらと性格が異なる可能性がある。なお、5020、5021、368、361-OPおよび369、367、366、354-OPは各々東西に延びる柵列の可能性がある。

遺物は9個の柱穴から出土し、土師器、須恵器、製塩土器が認められる。全て細片で時期を限定できないが、明らかに新しい遺物を含まないことから古代に遡る可能性が高い。



第34図 III A区西部柱穴群出土土器 (1/4)

(77~79・81)はA類、(80、82)はB類である。

(77)は復原口径15.4cm、器高4.7cmを測る。

口縁内面にヨコナデによる段を持ち上端に浅い沈線を巡らす。

高台は、断面三角形でハ字形に開く。内面はナデの後やや雑な暗紋を巡らす。

外面は摩滅が著しいが指押え痕を僅かに残す。明赤褐色(2.5YR5/8)を呈す。

(78)は復原口径14.0cmを測る。口縁端面はやや外反し、内面に痕跡状の沈線を巡らす。

外面は指押さえの後ヘラ磨きする。橙色(5 YR6/6)を呈す。

(79~81)の高台は(77)と同型で、(82)

がやや大振りである。遺物の時期は(77)は森村編年3期に該当し10世紀初頭の年代が与えられる。他のものについても10世紀前半から中頃に納まるであろう。

(77)は復原口径15.4cm、器高4.7cmを測る。

口縁内面にヨコナデによる段を持ち上端に浅い沈線を巡らす。

高台は、断面三角形でハ字形に開く。内面はナデの後やや雑な暗紋を巡らす。

外面は摩滅が著しいが指押え痕を僅かに残す。明赤褐色(2.5YR5/8)を呈す。

(78)は復原口径14.0cmを測る。口縁端面はやや外反し、内面に痕跡状の沈線を巡らす。

外面は指押さえの後ヘラ磨きする。橙色(5 YR6/6)を呈す。

(79~81)の高台は(77)と同型で、(82)

がやや大振りである。遺物の時期は(77)は森村編年3期に該当し10世紀初頭の年代が与えられる。他のものについても10世紀前半から中頃に納まるであろう。

(77)は復原口径15.4cm、器高4.7cmを測る。

口縁内面にヨコナデによる段を持ち上端に浅い沈線を巡らす。

高台は、断面三角形でハ字形に開く。内面はナデの後やや雑な暗紋を巡らす。

外面は摩滅が著しいが指押え痕を僅かに残す。明赤褐色(2.5YR5/8)を呈す。

(78)は復原口径14.0cmを測る。口縁端面はやや外反し、内面に痕跡状の沈線を巡らす。

外面は指押さえの後ヘラ磨きする。橙色(5 YR6/6)を呈す。

(79~81)の高台は(77)と同型で、(82)

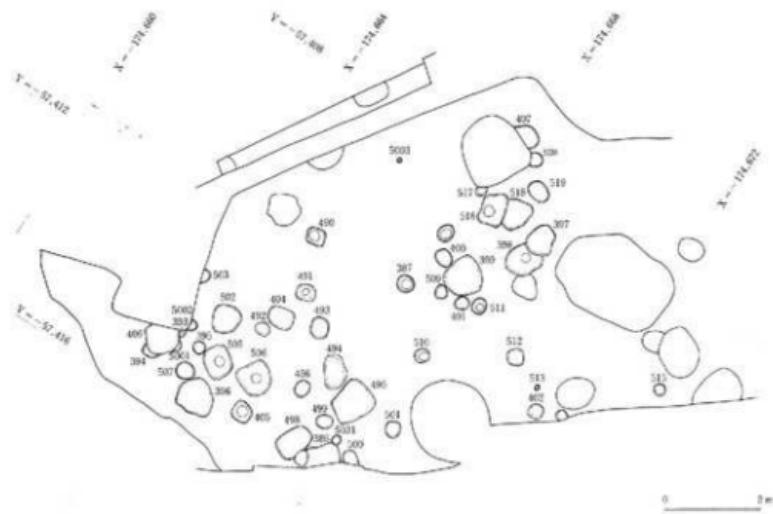
がやや大振りである。遺物の時期は(77)は森村編年3期に該当し10世紀初頭の年代が与えられる。他のものについても10世紀前半から中頃に納まるであろう。

(77)は復原口径15.4cm、器高4.7cmを測る。

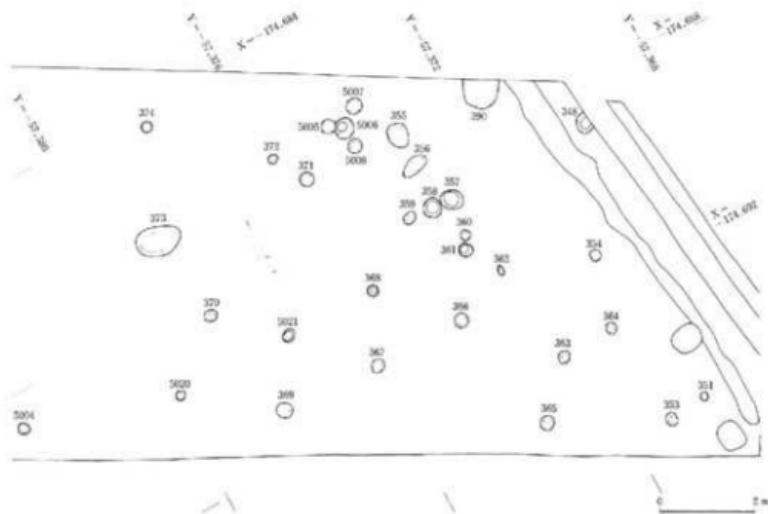
口縁内面にヨコナデによる段を持ち上端に浅い沈線を巡らす。

高台は、断面三角形でハ字形に開く。内面はナデの後やや雑な暗紋を巡らす。

外面は摩滅が著しいが指押え痕を僅かに残す。明赤褐色(2.5YR5/8)を呈す。



第35図 III A区西部柱穴群 (1/120)



第36図 III A区東部柱穴群 (1/120)

IV D 区柱穴群 (第37図)

図版25・36)

IV D 区中央から東側に位置する。東西8m、南北11mの範囲から検出された、建物に復原できない11個の柱穴を総称する。分布は中央の現水路を挟んで南側に集中するが、北側は後世に削平された可能性が高い。規模は径0.3~0.4mを測り、平面形は円形と隅円長方形の2種類が認められる。

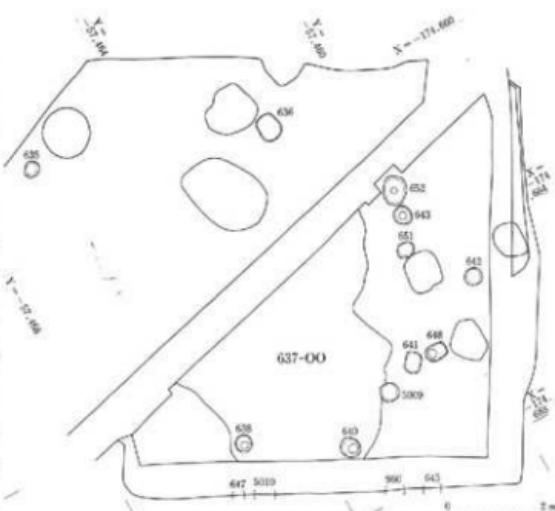
埋土はにぶい黄褐色を呈するものが多い。638-OP、640-OP、5009-OPは7世紀代の637-OOを切る。

遺物は4個の柱穴から出土し、土師器、須恵器がある。(166)は652-OP出土の須恵器で外面は平行叩き上を刷毛調整、内面は同心円叩きを施す。(161)は646-OP出土で、須恵器杯蓋である。造構群の時期は、7、8世紀代を上限と考えられる。

土坑

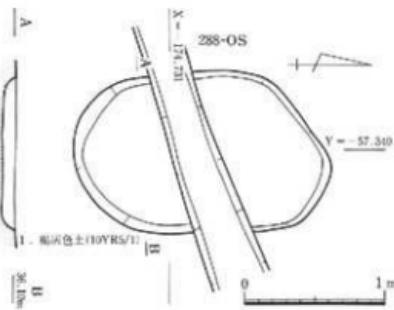
275-OO (第38図)

I C 区掘立柱建物1002-OBの東約5mで検出した。中世期溝288-OSに先行する。長軸1.7m、短軸1.1mを測る梢円形土坑で、軸方向は真北を向く、残存状況は不良で、深さ8cmを測る。埋土は單一で、炭塊黄褐色粘土塊を含む褐灰色土(10YR5/1 R5/1)である。遺物は未検出。



第37図 IV D区柱穴群 (1/120)

275-OO (Figure 38)



第38図 275-OO 平面・断面図 (1/40)

239-OO

I C 区据立柱建物1002-OBの西約15mにて検出した。遺構の西端は搅乱により消失し、形状には不明な点が残る。溝の可能性が残る。現存長0.9m、幅1m、深さ0.2mを測る。埋土は單一で、細礫混りの黒褐色土(2.5YR3/2)である。遺物は未検出。

655-OO (図版34)

II A 区の東端部に検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径約70cm、深さ28cmを測る。埋土は1層で、灰黄褐色シルト(10YR5/2)層である。遺物は少なく、土師器10点、黒色土器1点である。全て細片のため、器形は不明である。

739-OO (第39図 図版34)

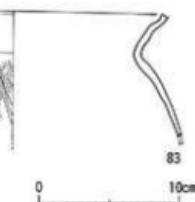
II B-2 区の西端部に検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径約30cm、深さ約10cmを測る。埋土は1層で、オリーブ褐色シルト(2.5YR4/4)である。

遺物は土師器の壺3点、須恵器の器形不

明2点である。土師器壺(83)は口径22cmを測る。刷毛目下に成形時の指頭圧による凸凹が残る。

377-OO (第40・41図 図版15・34)

III区西侧に位置する。南半分を道路側溝で破壊される。平面形は概ね東西方向に軸を持つ梢円形を呈し、長径約1.05m、短径0.87m、深さ0.43mを測る。断面は摺鉢形を呈す。埋土は上下2層に別れ上層はにぶい黄褐色砂質シルト(10YR4/3)、下層は同色(10YR4/3、10YR5/4)砂質シルトのブロック土である。



第39図 739-OO出土土器(1/4)

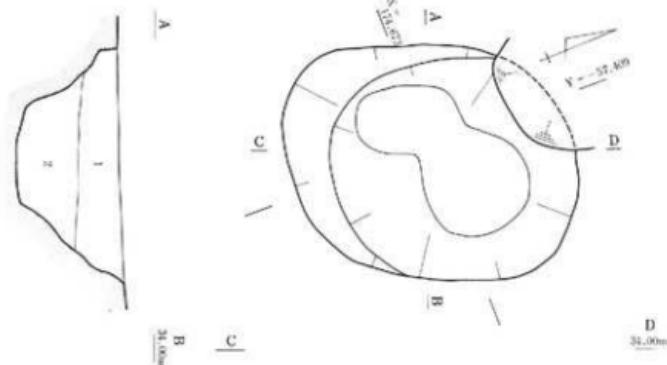
第40図 377-OO
出土土器(1/4)

出土遺物は、土師器37片、須恵器7片、黒色土器2片、製塙上器1片を数える。(84)は須恵器の塊口縁部である。口縁端部を丸く肥厚させその下をヨコナデでくぼます。復原口径12.0cmを測る。径0.5mm以下の白色砂粒を含み断面は灰色(10YR6/1)、口縁上半外面は灰色(5Y1/5)を呈する。黒色土器はすべてB類である。

(84)は、鍛窯産の可能性が高く10世紀代であり、遺構年代の上限を示すと考えられる。

378-OO (第41・43図 図版15・29)

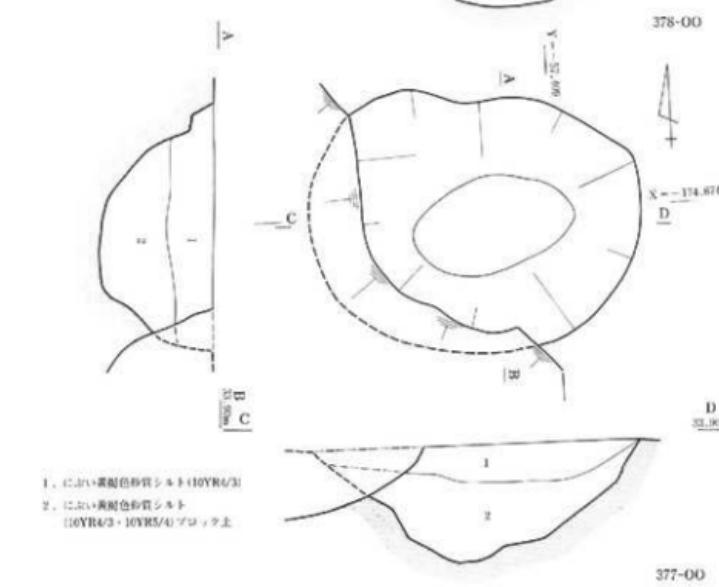
III A 区西侧に位置する。平面形は南北に主軸を持つ梢円形を呈し、長径約1.05m、短径0.83m、深さ0.37mを測る。断面は摺鉢形を呈し、底面が8字形をなす。埋土は上層がに



1. にかい黄褐色(10YR4/3)・褐色(10YR4/6)

シートブロック上

2. 褐色粗粒シート(10YR4/4)



1. にかい黄褐色砂質シート(10YR4/3)

2. にかい黄褐色砂質シート

(10YR4/3 + 10YR5/4)ブロック上

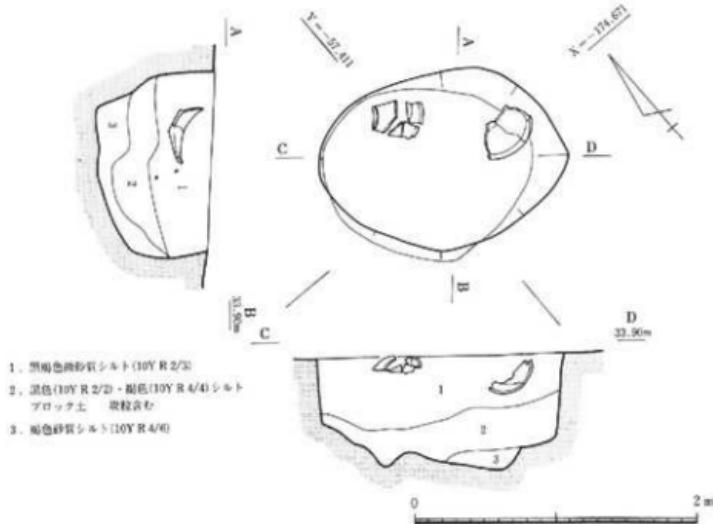


第41図 377・378-OO平面・断面図 (1/40)

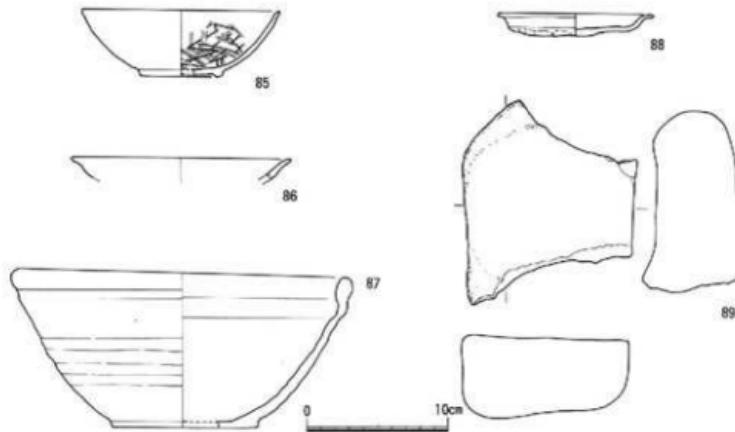
ぶい黄褐色シルト（10YR4/3）と褐色（10YR4/6）のブロック土で、下層は褐色粗砂混シルト（10YR4/4）である。出土遺物は上師器35片、須恵器4片、黒色土器5片、石皿1片を数える。（88）は土師器の皿で復原口径11.0cm、器高1.6cmを測る。端面は外側へ折れ曲がる。底部内外面は指押さえ痕が多数残りその上を撫でる。にぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、径2mm以下白色砂粒、雲母を含む。石皿（89）は上下端を欠損するが、現存長14.3cm、幅12.3cm、厚さ5.8cmを測る。上面の中央部が平端面をなし使用による光沢を持つ。側面にも部分的に擦り跡が見られる。細粒砂岩製で下面は疊質になる。（88）は10世紀末から、11世紀初頭に比定され、他の遺物とも矛盾なく遺構はこの時期と考えられる。

379-OO (第42・43図 図版15・29・30)

III A区西側に位置する。平面は東西に主軸を持つ梢円形を呈し、長径0.88m、短径0.65m、深さ0.4mを測る。断面は、逆台形を呈し、一部で袋状を呈する。埋土は3層に分かれる。上層は黒褐色微砂質シルト（10YR2/3）で厚さ13~26cm、中層は黒色（10YR2/2）ないし褐色（10YR4/4）シルトのブロック土で炭粒をかなり多く含み、厚さ10~15cm、下層は褐色砂質シルト（10YR4/6）で厚さ約6cmを測る。上層中からは、鍊鉢（87）が割れた状態で出土している。



第42図 379-OO平面・断面図 (1/40)



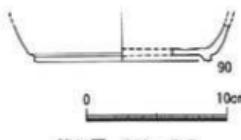
第43図 378・379-OO出土遺物 (1/4)

出土遺物は、土師器71片、須恵器11片、黒色土器22片、製塙土器1片、縄釉2片を数える。(85)は黒色土器A類の壺である。復原口径14.0cm、器高5.8cmを測る。口縁内外面は強くヨコナデし段を作る。高台は断面逆台形で低い。体部外面はヘラ磨きし、内面は暗紋を巡らす。胎土に白、黒、赤色粒を含む。(86)は縄釉の皿である。復原口径15.8cmを測る。見込み部分に浅い1状の沈線を巡らし段とする。釉はほとんど剥離する。胎土は浅黄色(10YR8/3)を呈し、精良で軟質である。(87)は須恵質練鉢ではば完形である。口径23.2cm、器高11.2cmを測る。口縁端部は丸みを持って肥厚し玉縁状を呈す。底面は平らで糸切り痕を残し、体部内外面は回転ナデを施す。灰白色(10YR8/1)を呈し径1mm以下の白黒微粒を含む。やや軟質である。

時期は、(85)が森村編年V期に該当し10世紀後葉とされる。(87)は縄窯跡群黒岩1号窯期の特徴を備え10世紀第4半期とされる。^(注2) 両者の時期はほぼ一致しており、遺構の年代と考えて大過無からう。

610-OO (第44図 図版35)

IV B区で検出した。800-OPに後出する。長軸1.05m、短軸0.9m、の梢円形土坑で、深さ0.2mを測る。断面は弧状を呈し、埋土は暗褐色砂質土(7.5YR3/3)の単一層である。遺物は土師器・須恵器の細片で、図化資料



第44図 610-OO
出土土器 (1/4)

に須恵器杯（90）がある。ナデ調整の底部に「ハ」の字形の高台が付く。

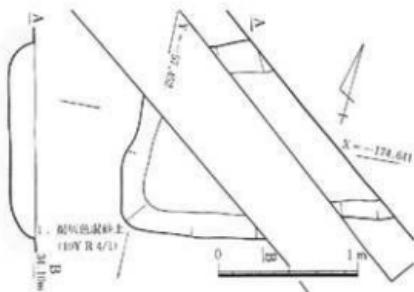
614-OO (第45図)

IV B 区掘立柱建物1005-OBの東約1mで検出した。調査区外へ伸びるが、長軸2m以上、短軸1.38mを測る隅丸長方形の土坑である。断面は偏平面U字形を呈し、深さ20cm。埋土は黄褐色粘土（地山土）をブロック状に含む褐灰色混砂土（10YR4/1）である。炭塊がみられる。遺物は土師器片が検出されている。

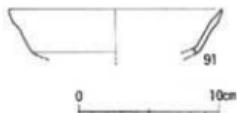
347-OS (第46・47図 図版16・34)

III A 区東端に位置する。直線的に延びる溝で延長9.8mを検出した。幅0.2~0.5m、深さ0.5~0.1mを測り、北側でやや広く深くなる。方向は真北より西に5度振る。南側で長さ0.25mに渡り途切れる部分がある。断面は浅いU字形を呈す。埋土は灰黄褐色砂質シルト（10YS5/2）で褐色斑（10YR4/4）を含む。建物1003-OBに伴う柱穴349-OPに切られる。

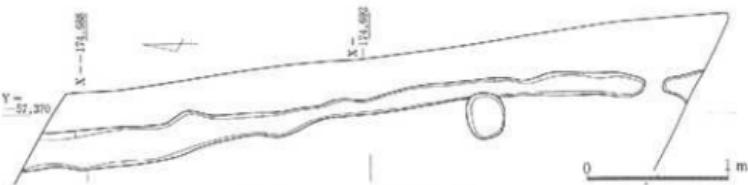
出土遺物は須恵器2片のみである。（91）は杯身で、体部はやや外反し復原口径15.0cm、器高3.3cmを測る。時期は7、8世紀代と推定される。遺構も切り合から同様に考えられる。



第45図 614-OO 平面・断面図 (1/40)



第46図 347-OS
出土土器 (1/4)



第47図 347-OS 平面図 (1/80)

掘立柱列

1021-OF (図版8)

I C 区の中央、II A 区1010-OBの南23mで検出した。柱間4間の掘立柱列で、現存長6.5mを測る。柱掘形は不整円形で径25~50cmを測る。柱間寸法は不規則で概略数値で1.2~

1.9mを測る。軸方向は真北より西に3度振れている。遺物は未検出だが、①掘形埋上が掘立柱建物のそれに共通する②軸方向の一致をみる掘立柱建物(1013-OB)があるの2点より当該期に含めた。

第5節 鎌倉時代～室町時代

〈概況〉 耕作遺構(溝)が主体で、他に柱穴群、掘立柱列、土坑等がある。溝は単独に走行するI類と2条併走するII類に区別でき、その内溝II類は条里地割に伴う畦溝の可能性が指摘できる。しかし溝II類と同時代性を有する耕土は存在しない。遺構の上位に位置する中世後期の耕土(基本層序第II-2層)が形成される際に削平を受けた結果であろう。柱穴群

III B・III C区柱穴群(第48図 図版17・18)

III B・III C区に分布する柱穴群である。帶状に検出されているため建物の復元は行わなかった。総数61個を数え、平面形は円形・隅丸方形を基本とし径30~40cmを測るものが多い。柱穴は埋土により、〈A類〉にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)〈B類〉褐灰色砂質土(10YR4/1)〈C類〉黒褐色砂質土(7.5YR3/2)に大別される。傾向として、A・C類が多くA類はIII B区にC類はIII B区東端からIII C区に分布している。遺物はIII C区483-OP(C類)のみ検出されている。土師器皿、瓦器塊、瓦質壺の破片がある。(92)は土師器皿で、径13cmを測る。形態的に13世紀前半～中頃と推定される。

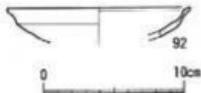
土坑

31-OO(第50図)

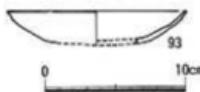
I B区の東端に位置する。現存長3.1m、幅0.9m、深さ0.25mを測る。平面形は不整な長梢円形である。断面は浅いU字形を呈し、底面には径0.6mの円形の落込みを伴う。埋土は暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2)である。遺物は、瓦器1片を出土している。

32-OO(第49・50図 図版33)

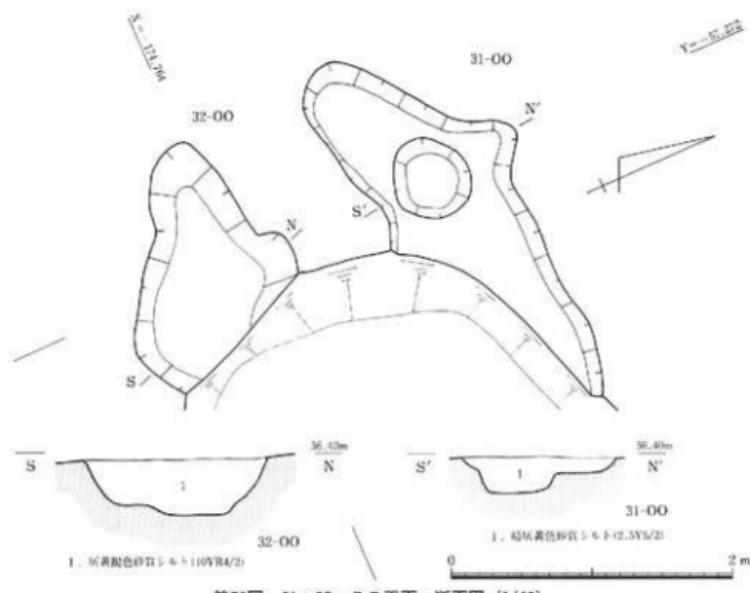
I B区の東端に位置する。東側を搅乱坑に切られるが、現存長1.5m、幅1.3m、深さ0.4mを測り、平面は現状では不整な梢円形を呈す。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は灰黄褐色砂質シルト(10YR4/2)である。出土遺物は



第48図 483-OP
出土土器 (1/4)



第49図 32-OO
出土土器 (1/4)



第50図 31・32-00平面・断面図 (1/40)

土師器3片、瓦器6片を数える。(93)は瓦器皿で復原口径12.6cm、器高2.3cmを測る。体底部は丸みを持ち端面のみヨコナデする。遺物の時期は13世紀代であろう。

475-00

III B区東端で検出した。長軸1.4m、短軸85cm、深さ12cmを測る隅丸長方形の土坑である。断面は偏平なU字形を呈し、埋土は黄褐色混砂土(2.5Y5/4)である。焼土塊や炭塊が混じるのが特徴である。遺物は未検出。

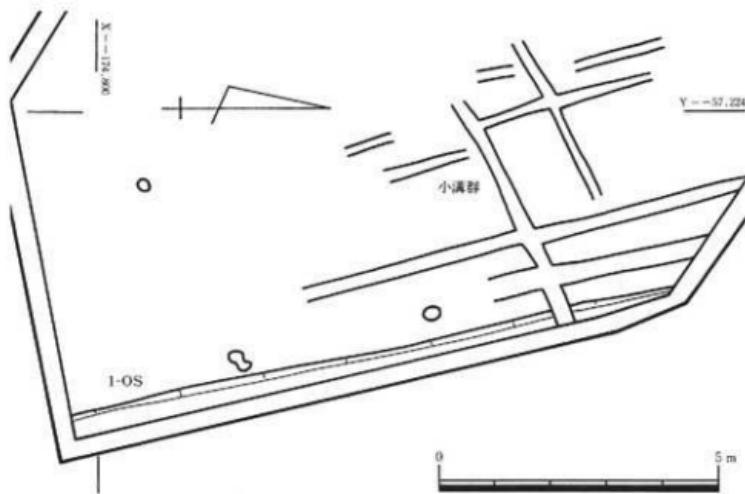
溝I類

1-OS (第51・52図 図版2)

I A区東端で検出した。調査区東壁に沿って検出されているので全容は不明。現存長12m、幅80cm以上、深さ15cmを測る。走行方向は真北より西へ15度振れている。断面は偏平なU字形で、埋土は黄褐色砂+細礫(5Y6/1)である。

遺物には、土師器、須恵器、縄釉皿、

第51図 1-OS出土土器 (1/4)

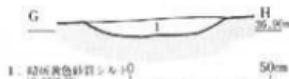


第52図 1-OS 平面図 (1/100)

瓦器塼、瓦質ねり鉢の破片が検出されている。瓦質ねり鉢 (94) は口径27.7cmを測り、焼成は軟質である。摩耗が進み外面の調整は不明だが、形態的に15世紀前半～中頃と推定される。遺構の検出面は基本層序第IV層上面で上位に同第II b層が位置する。遺構の時期を先の瓦質ねり鉢で15世紀前半～中頃とすると、本遺構が基本層序第II b層の下位に位置する遺構群中で最も新しく位置付けられる。従って、本遺構をもって基本層序第II b層の上限が決定されることになる。

146-OS (第53・59図)

I B区西側に位置する。幅約50cm、深さ6～8cmを測る。直線的に延び、方向は真北より77度東へ振る。

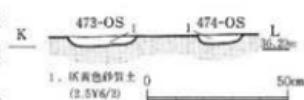


埋土は暗黄褐色砂質シルト (2.5Y5/2) で、明黄褐色 (10YR6/8) を含む。

出土遺物は土師器1片、須恵器1片、瓦器1片がある。細片のため時期は不明である。

473-OS (第54・59図)

III B区東端で検出した。474-OSに先行する。調査区外に伸びるが、現存長4.5m、幅40～50cm以上、深さ8cmを測る。埋土は灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) の單一層である。遺物は未検出。



第54図 473・474-OS 断面図 (1/20)

474-OS (第54・59図)

III B 区東端で検出した。473-OSに後出する。調査区外に伸びるが、現存長4.3m、幅20~50cm、深さ7cmを測る。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は单一で473-OSに共通する灰黄色砂質土（2.5Y6/2）である。遺物は未検出。

472-OS (第55・59図)

III B 区東端で検出した。473-OSに先行する。調査区外に伸びるが、現存長3m、幅40cm、深さ6cmを測る。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は暗灰黄色砂質土（2.5Y6/2）の單一層。遺物は未検出。



第55図 472-OS 断面図 (1/20)

溝II類

87-OS (第58・59図 図版4)

I B 区西側に位置する。幅0.7~1.0m、深さ0.05~0.07mを測る。直線的に延びるが、検出範囲の中央部で2条に別れ、長さ7.5m、幅0.8mのテラスを作る。135-OSと平行関係にある。方向は真北より5度西へ振る。埋土は灰黄色砂質シルト（2.5Y6/2）で、褐色斑（2.5Y4/4）を含む。

出土遺物は土師器3片、須恵器7片、瓦器3片がある。すべて小片であるが、遺構は、瓦器を含むことから12世紀を上限とするであろう。

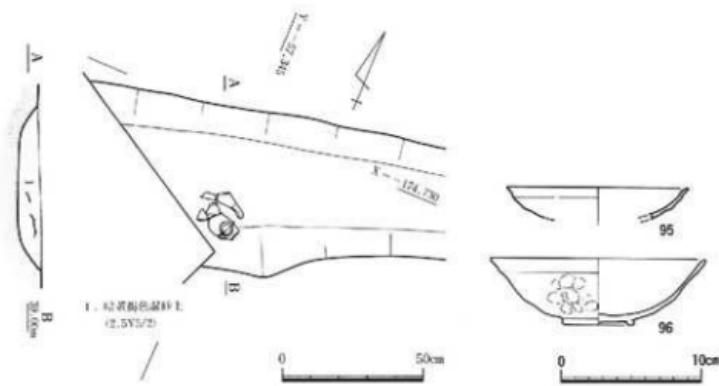
135-OS (第58・59図)

I B 区西側に位置する。幅0.6m、深さ0.11mを測る。直線的に延び、87-OSの東側に幅1.5mのテラスをおいてほぼ平行する。南端は搅乱坑に切られその南側では検出されない。埋土は灰黄色砂質シルト（2.5Y6/2）で、黄褐色斑（2.5Y5/6）を含む。遺物は出土しなかった。

244-OS (第56・57・58・59図 図版7・29・33)

I C 区からIII B 区にかけて検出した。両区の間に位置するII B 区では遺構面の削平が著しく溝の継ぎは未検出に終わっている。真北より73.5度東へ振れる方向で走行し、東接する288-OSとは約1~1.6mの間隔で平行する位置関係にある。現存長34m、幅20~50cm、深さ4~10cmを測り、溝底は I C 区西端がIII B 区東端より約5cm高い。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は暗黄灰色混砂土（2.5Y5/2）の單一層である。

遺物は僅かで、土師器・須恵器・瓦器の細片の他、土師器皿（95）と瓦器塊（96）がある。瓦器塊（96）は溝の東端（I C 区）にて溝底より少し浮いた状態で検出されている。



第56図 244-OS 土器出土状況 (1/20)

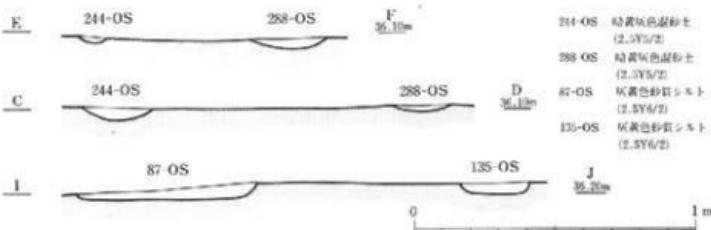
第57図 244-OS
出土土器 (1/4)

口径15.2cm、器高4.7cmを測る。暗紋は施されてはいるが、摩耗のため図化はできない。

造構の時期は先の遺物より13世紀前半と推定される。

288-OS (第58・59図 図版7)

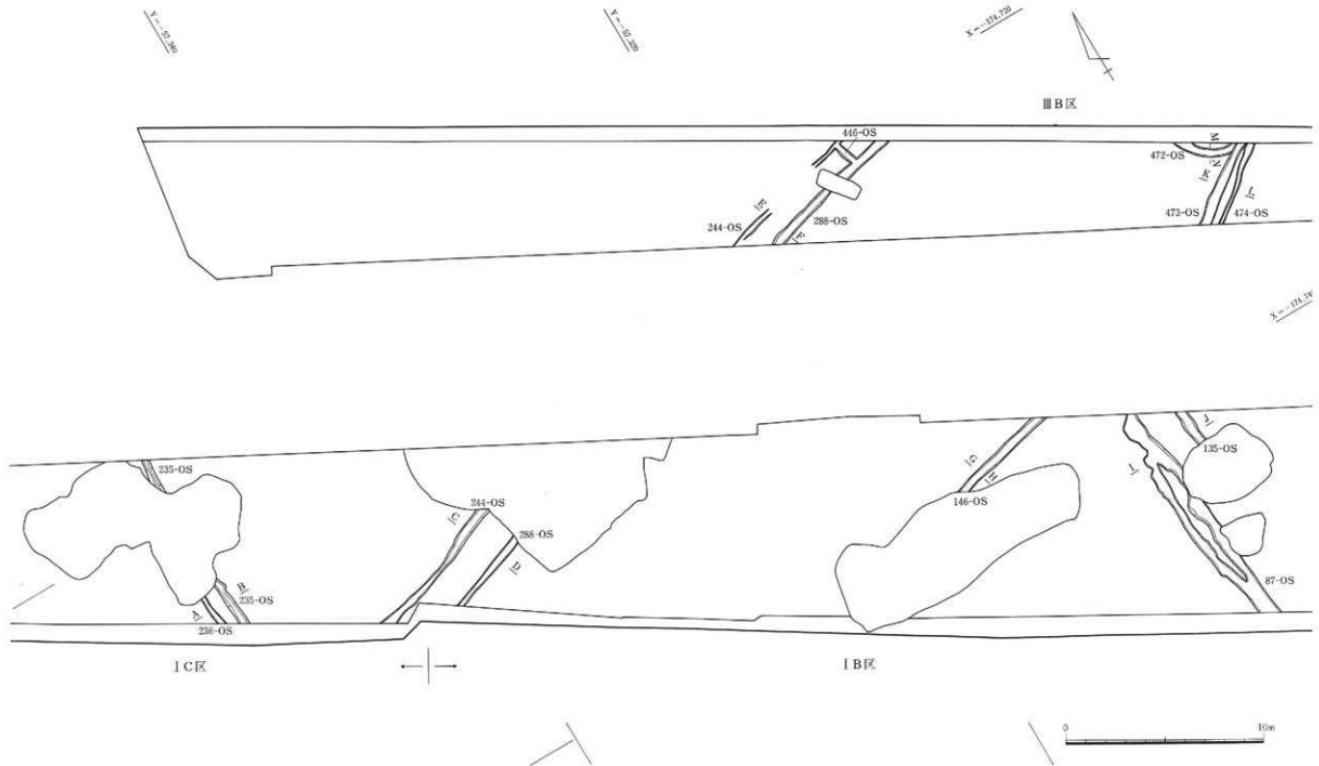
I C・II B・III B区にかけて検出した。244-OSと併走する溝で、III B区西端にて446-OSを介して244-OSと連絡している。現存長32m、幅20~50cm、深さ3~10cmを測り、溝底は446-OS同様 I C区西端がIII B区東端より約5cm高い。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は244-OSに共通する暗黄灰色混砂土の単一層である。遺物は土師器・須恵器・瓦器の細片が検出されている。



第58図 87・135・244・288-OS 断面図 (1/20)

235-OS (第59・60図 図版8)

I C区で検出した。II B区では溝の伸張が予測されたが、遺構面の削平が著しく溝の統きは未検出に終わっている。走行方向は真北より4度西に振れている。現存長9.5mを測



第59図 I B・I C・III B区溝Ⅰ・II類平面図 (1/200)

るが、溝の中ほどは擾乱坑の存在により消失している。幅40cm、深さ10cmを測り、断面は緩やかな弧状を呈している。埋土は244-OSに共通する暗灰黄色混砂土で、単一層である。遺物は土師器・須恵器細第60図 236・235-OS断面図(1/20)片が検出されている。

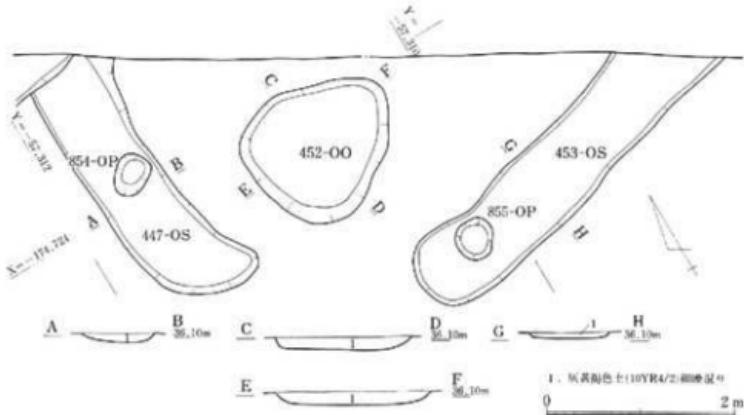
236-OS(第59・60図 図版8)

I C区235-OSの西隣で検出した。擾乱坑により大半は消失している。本来的には215-OSと併走する位置関係にあると推定される。現存長1.5m、幅30cm、深さ6cmを測る。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は235-OSに同様に244-OSに共通する。暗灰黄色混砂土の単一層である。遺物は未検出。

不明遺構

875-OX(第61図)

III B区西半で検出した。288-OS、854・855-OPに先行する。447-OS・453-OSの2条の溝と土坑452-OOで構成される遺構である。447-OSは現存長3m、深さ10cm、453-OSは現存長4m、深さ6cmを測る。ともに断面は偏平なU字形を呈し、埋土は細礫混りの灰黄褐色土(10YR4/2)である。上坑452-OOは、長軸1.65m、短軸1.5mを測り不整円形を呈する。深さ15cm、埋土は溝に共通する細礫混りの灰黄褐色土である。遺物が未検出で時期は不明だが、288-OSに先行することから13世紀前半を通過することは明らかである。



第61図 875-OX平面・断面図(1/60)

掘立柱列

1031-OF

IV A 区西半で検出した。2間の柱間で現存長2.2mを測る掘立柱列である。柱掘形は不整円形で径30~50cmを測る。柱根跡径は875-OPで10cm、858-OPで20cmを測る。周辺は擾乱が著しく前後の伸びが不明で、掘立柱列か掘立柱建物の柱列か判断できない。遺物は未検出だが、軸方向がN-18°-Wを測り条里地割りに一致することから当該期に含めた。

第6節 江戸時代

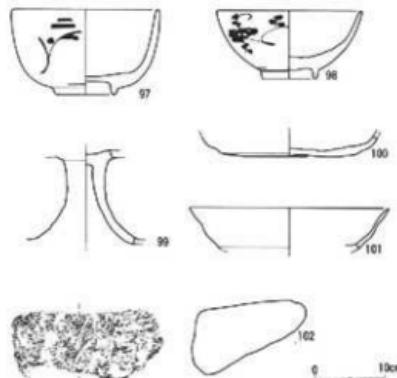
〈概況〉 遺構には小溝群、溝、井戸、土坑がある。第5節では耕作に伴う溝をI・II類に区別したが、ここでは小溝群を鋤溝・畝溝とし、溝III類として扱う。又、基本層序第II-2層は当該期の耕土であり、溝III類がこれに伴う耕作痕と考えられる。

井戸

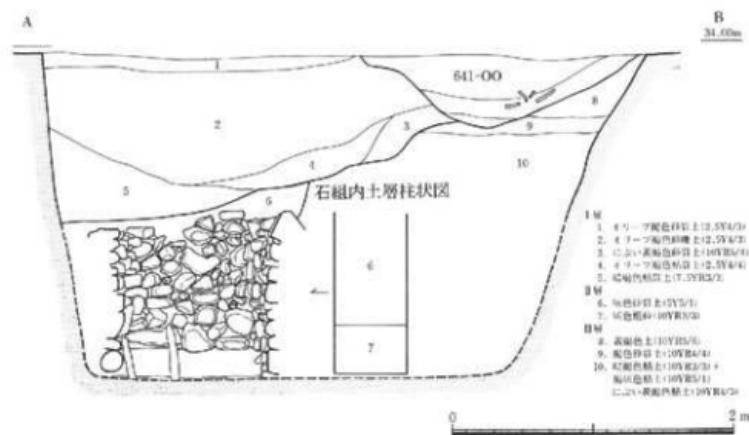
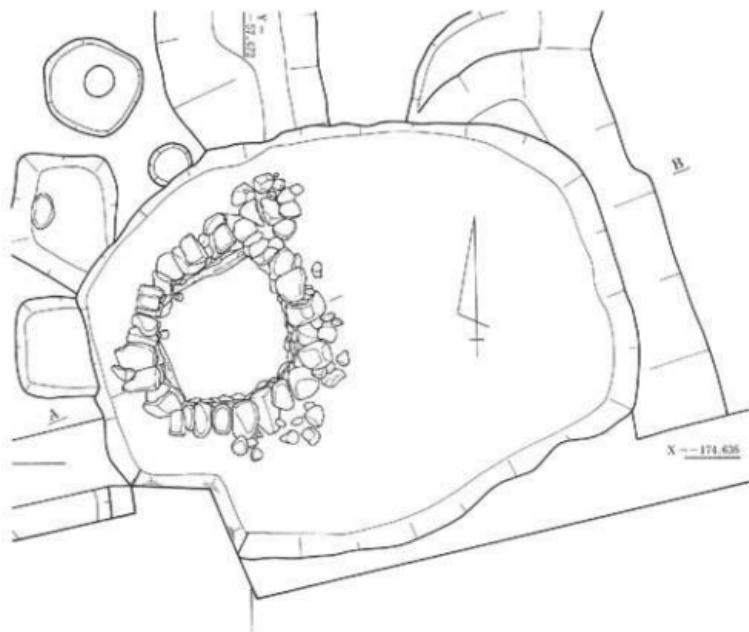
588-OW (第62・63図 図版24・25・30・35)

NB区西端で検出した。西端は641-OOに切られている。長軸4.2m、短軸3mを椭円形掘形の東端に石組が設けられている。石組は上部を欠失し、現存高1.2mを測る。石積は円礎・角礎の小口積を原則とし、平面形は一辺約1mを測る隅丸方形を呈する。石積の起点を対となる二隅に置くため、壁面の東と西側は緩やかな曲面を呈している。石積は勇水層である明青灰色粗砂+シルトから始められているが、連続する東壁と南壁は胸木組を基礎としている。埋土は3層に大別できる。第I層は石組上部抜き取り穴埋土で、円礎を多量に含むオリーブ褐色土を主体としている。第II層は石組内部に投入された土で、上位に灰色砂質土が下位に灰色粗砂が用いられている。出土遺物の大半は先の灰色砂質土出土である。第III層は掘形埋上で、地山土(黄褐色粘土)をブロック状に含む暗褐色土である。

遺物の主体は18世紀代の陶磁器で、一部に須恵器高杯(99)、須恵器杯(100・101)、軒平瓦(102)など7~9世紀の資料もみられる。軒平瓦は瓦当が剝離し風化が進行してい



第62図 588-OW出土遺物(1/4)



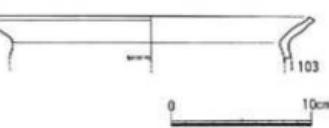
第63図 588-O W平面・断面図 (1/40)

る。色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。調整不明。18世紀代の陶磁器には、波佐見焼壺（97・98図版35-156・157）・現川焼・唐津焼など肥前焼、丹波焼、堺捕鉢（図版35-158）、信楽焼捕鉢（図版35-155）、美濃瀬戸系などがある。量的には波佐見焼の存在が^{注41}注意をひく。

土坑

616-OO（第64・67・68図 図版23・35）

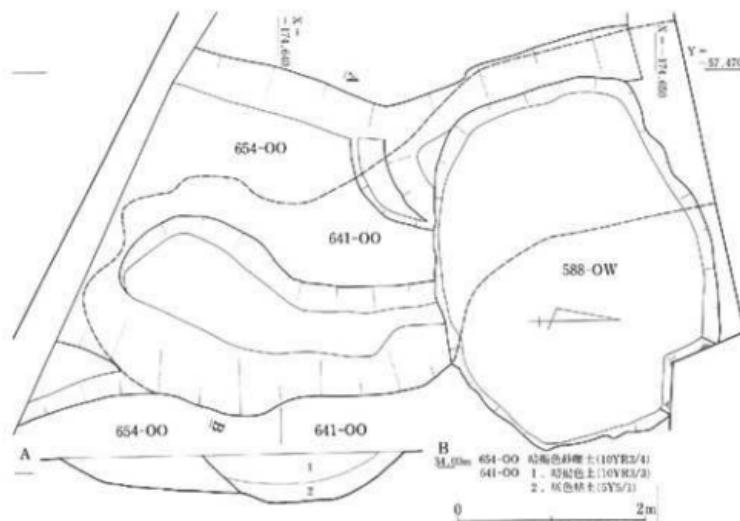
IV B区東端617-OSの上位に位置する。617-OS埋積後に実施された周辺くぼ地の整地の跡である。整地土は5~10cmの円礫を多量に含む褐色土（10YR4/4）および黄褐色土（10YR5/3）で、固くしめられている。厚さ30~60cmを測る。遺物の大半は奈良時代~平安時代にかけての土師器・須恵器である。（103）は土師器甕で、口縁端部の巻き込みは強くない。体部外面刷毛目調整。口径22.4cm。



第64図 616-OO出土土器（103）

654-OO（第65図 図版20）

IV B区西端で検出した。641-OOに先行する。形状には不明な点もあるが、調査区南



第65図 641・654-OO平面・断面図（1/60）

壁断面の観察に拠ると、深さ40cmを測る落ち込み状を呈している。埋土は暗褐色砂礫土(10YR3/4)の単一層で、遺物は染付の破片が検出されている。

641-OO (第65・66図)

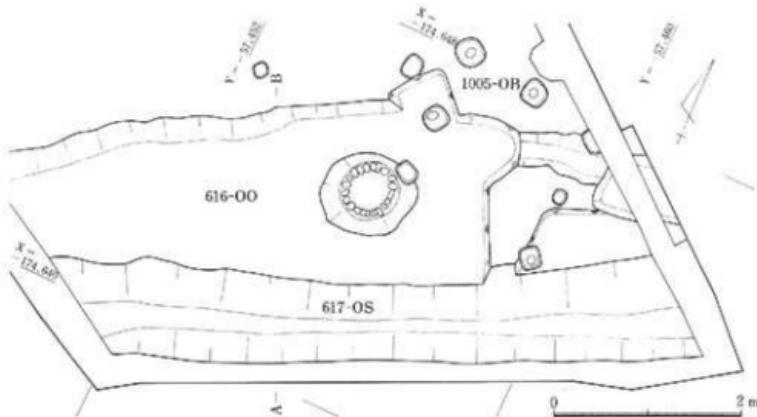
NB区西端で検出した。654-OO、588-OWに後出する土坑で、現存長6.7m、幅2~2.5m、深さ50cmを測り、溝状を呈する。埋土は、上層暗褐色土(10YR3/3)、下層灰色粗土(5Y5/1)に分離でき、下層には多量の近世瓦が投棄されていた。遺物は瓦の他に、17~18世紀代の陶器、磁器がある。(104)は伊万里焼ヒザ皿で、17世紀後半。

満

617-OS (第67・68・69図 図版23・29・36)



第67図 616-OO、617-OS断面図 (1/60)

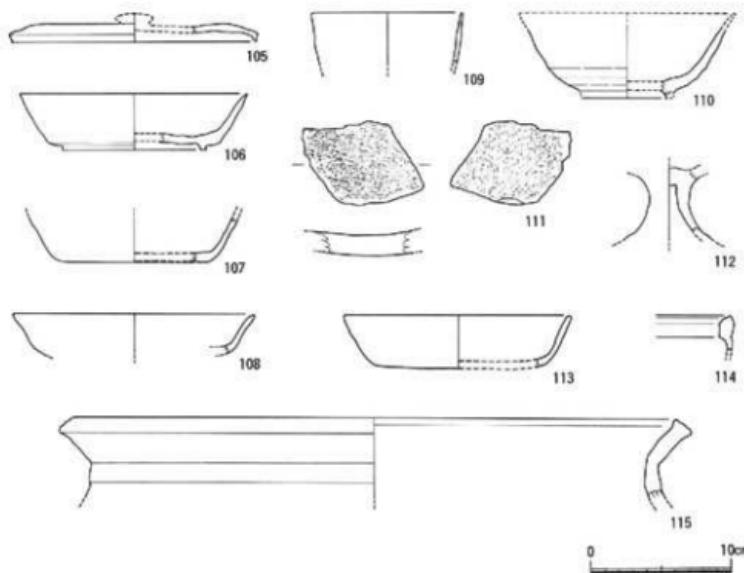


第68図 616-OO、617-OS平面図 (1/120)

NB区東端で検出した。真北より東へ65度振れて走行するが、調査区外へ伸びたり上位で整地が実施されていることなどから形状・規模に関しては不明な点が多い。現存長13.5m、幅2m以上、深さ1.8m以上を測る。断面はロート状を呈し、上半は斜方向に下半は鋭く凹形に掘削されている。埋土は上層（1～6層）、下層（7層）に分離される。上層は褐色・黄褐色粘土など地山土の混合で、下層はシルト、細砂の混合土である。

遺物は上層、特に3層に集中して検出されている。須恵器、土師器、青磁、陶器、瓦など時期別には7世紀から17世紀までの時間幅があり、量的には8～9世紀の資料が多い。

（112）は高杯脚柱部で杯部と脚裾部を欠損する。中村編年Ⅲ期の範囲に収まり7世紀後半。（113）は土師器杯で口径16cmを測る。端部の巻き込みは弱く、体部はヨコナデ調整に施る。底部調整は不明で、暗文は未確認。（106）は須恵器杯で直立気味の高台が付く。口径16cm。（107）はヘラ切り未調整の須恵器杯底部。（108）は口縁端部が外反する須恵器杯。（109）は口縁部の直口する須恵器杯。口径10.6cm。（105）は縁部の屈曲の弱い須恵器杯蓋で、口径17.2cmを測る。（115）は口径42.6cmを測る大形甕口縁部で、丸味を有



第69図 617-O S出土遺物 (1/4)

する端面が内外に肥厚している。(114)は製塙土器で、口縁端部が肥厚するのが特徴である。ナデ調整で焼成堅緻。浅黄橙色。以上が8、9世紀の資料である。(111)は平瓦で、凸面には繩目叩き痕が凹面には布目痕が残る。灰色を呈し焼成堅緻。平安時代～鎌倉時代か。(110)は唐津焼塊で、内面と口縁部外面に施釉されている。なお、図版36には中国製青磁(159)を載せている。線描蓮弁文で15世紀後半～16世紀前半。

遺物の主体は8、9世紀の資料ではあるが、唐津焼塊の検出により溝の埋没時期は17世紀中頃におさえられる。溝の埋没は埋土に多量の地山土がブロック状に含まれていることから人为的に埋められた結果と見做せ、8、9世紀資料の包含はその際に当該期の遺構を削平し埋土にあてたことを示唆している。

なお、本遺構の検出面は基本層序第Ⅳ層上面で上位には基本層序第Ⅱa層が位置する。本遺構はⅡa層下位の遺構群中最も新しく位置付けられ、本遺構の時期をもってⅡa層の上限とみなすことができる。

溝III類

I A区東部小溝群（第70図 図版2）

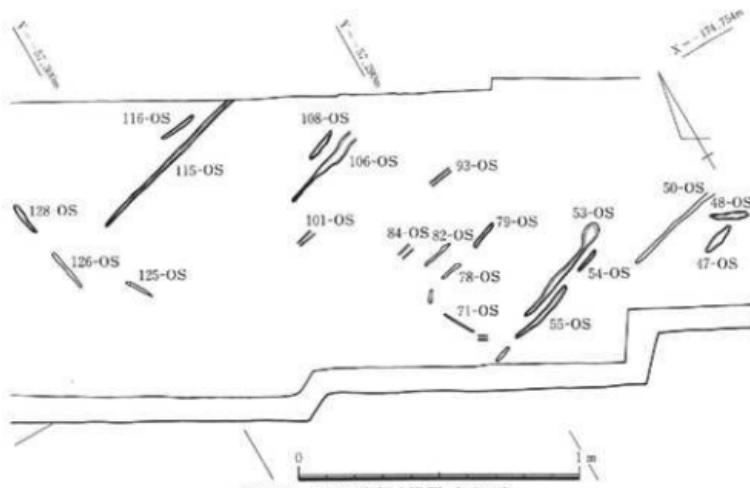
I A区東半で検出した。鍛溝・畝溝等の小溝群で、概ね幅20～30cm、深さ4～5cmを測り、断面は弧状を呈している。方位によりa類(N-70°-E)とb類(N-15°-W)に分けられる。a類には、5・9・16・17・20-OSがある。b類には、2・3・6～8・11～15・17～19-OSがある。埋土は全てオリーブ黄砂質土(5Y6/3)で、上層の基本層序第Ⅱb層に共通する。遺物は未検出。

I B区東部小溝群（第71図 図版3）

I B区東半部に位置する。東西26m、南北10mの範囲に分布する小溝群を総称する。個々の遺構は、幅0.1～0.2m、深さ0.03～0.05mを測り、断面は浅いU字形を呈し直線的に延びる。検出長は最大で6.2m(115-OS)を測り、多くは1m前後である。溝の延びる方向は3種類に大別される。概ね東西に向くものは、真北より東に20～21度振る。南北に向くものは真北より西へ10度振るもの(126-OS、128-OS)と30度振るもの(71-OS、125-OS)が認められる。東西に延びるものが圧倒的に多い。両者は分布域を異にしており南北に延びるものは71-OSを除き東半に位置する。東西に延びる溝には、0.2～0.4mの間隔を於て2条が平行して走る状況(116-OSと115-OS、108-OSと106-OS、81-OSと78-OS、53-OSと55-OSおよび54-OS)が認められる。これらは更に約4～5mの間隔を置いて相互に平行し、何らかの区画的機能が想定される。溝の中には、53-O



第70図 IA区東部小溝群 (1/200)



第71図 IB区東部小溝群 (1/200)

Sの様に片方が土坑状に膨らむものがある。遺構の埋土は砂質シルトからなり、色調は暗灰色（2.5Y5/2）と黄褐色（2.5Y5/3）に分かれるが、分布上の差は認められない。

遺物は115-OSから瓦器1片を出土したのみである。埋土は基本層位の第II層に類似することから15世紀以降近世にかけての時期が想定される。

621-OS（図版26・36）

IVD区小溝群を構成する一つの溝である。幅1.5m、深さ0.3mを測る。概ね東北より75度東の方向に延びる。東端で浅くなり2条に分岐することから、複数の小溝が重複している可能性がある。埋土は上層がにぶい黄橙色微砂質土（10YR3/6）、下層が褐色砂質シルト（10YR4/4）である。

遺物は土師器7片、須恵器9片、陶器、磁器各1片を数える。（162）は陶器の鉢で口縁部外面に左上がりの平行叩き目を施す。赤褐色（2.5YR5/6）を呈し径0.5～2mmの白色砂粒と雲母を含む。（163）は磁器の口縁部で表面に透明釉をかける。胎土は明緑灰色（10GY8/1）で近世期の所産と考えられる。

注（1） 本文での須恵器編年は、中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」陶邑田 大阪府教育委員会 1978に、同じく奈良時代、平安時代の土師器は『平城宮発掘調査報告書』Ⅸ 奈良国立文化財研究所 1986による。

注（2） 森村健一「堺市内出土黒色土器について」『堺環濠都市遺跡』堺市教育委員会 1981

注（3） 水谷秀克 石井清司「難窯跡群について」『中近世土器の基礎研究2』 日本中世土器研究会 1986

注（4） 近世陶磁器に関しては森村健一氏より御教示を得た。記して謝意を表したい。

第5章 まとめ

今回の調査では搅乱による損傷が著しく、遺構および遺物包含層の遺存状態があまり良好ではなかった。遺構数は約800個を数えるが、出土遺物内容に乏しく時期決定には不明な点が数多く残る。以下、時代ごとに調査成果を概括しておく。

〈縄文時代～古墳時代〉

基本層序第II層より縄文時代石塚1点と須恵器片が得られている。本遺跡から水間鉄道をはさみ西方に位置する石才南遺跡では、弥生時代中・後期と古墳時代中・後期の集落跡が検出されているが、本遺跡では先の須恵器片を除くと遺構・遺物とも皆無で石才南遺跡からの遺構の拡がりは認められない。

〈飛鳥時代〉

当該期の遺構はIV D区で検出された落ち込み状土坑637-OOのみで、遺構外遺物としてはIV B・IV D区の近世期包含層（基本層序第II-1層）に僅かにみられる程度である。従って、後世の削平や搅乱による遺構消失を考慮しても、当該期の遺構分布範囲はIV B・IV D区周辺に限定され、本来の遺構密度が低くかったと推定される。

〈奈良時代～平安時代〉

掘立柱建物、柱穴群、溝、土坑、掘立柱列の遺構があり、当地に古代集落が存在していたことが窺える。時期決定には疑問点も残るが、遺物と遺構の重複関係から確実に奈良時代もしくは先行する時期と判明するのはIII A区溝347-OSのみで、掘立柱建物をはじめ遺構の大半は平安時代に下ると推定される。掘立柱建物と土坑の一部には時期比定の可能な資料があり、それらによると少なくとも3時期に区分できると推定される。〈I期〉 9世紀前半～中頃。IV B区掘立柱建物1006-OBがある。〈II期〉 9世紀後半から10世紀中頃。I B区掘立柱建物1002-OB、III A区西部柱穴群がある。〈III期〉 10世紀後半～11世紀初頭。III A区土坑378・379-OOがあり、隣接する377-OOも当該期の可能性が残る。

掘立柱建物は計15棟検出されている。しかし、建物規模の全容が知られるのはII B区掘立柱建物1002-OBとIV B区1007-OBの2棟のみで、他は調査区外に伸びたりして不十分な検出状況にあり、建物の配置関係などは不明である。ただし、III A区掘立柱建物1003-OBとIV B区1008-OBは柱間寸法や柱据形の配置からみて縦柱建物か庇付建物になる可能性が高いと指摘できる。

〈鎌倉時代～室町時代〉

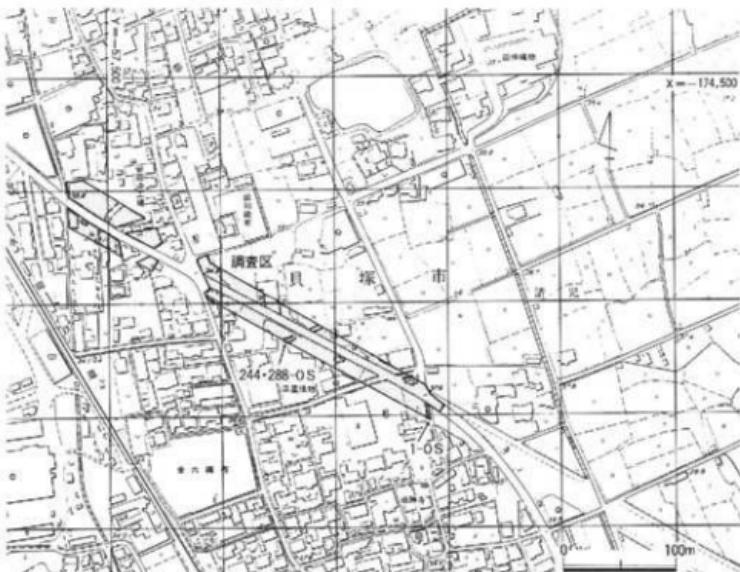
柱穴群・土坑もあるが、遺構の主体は耕作に伴う溝である。先代同様、時期決定は不明な点が残るが現状では下記の2時期に分けられる。〈I期〉 13世紀前半。III B区・C区柱穴群も可能性が残るが、確実な資料はII B区溝244-OSである。〈II期〉 15世紀前半～中頃。I A区溝1-OSがある。

I期溝244-OSを併走する溝288-OSと一体の遺構（条里坪界溝）とみなすと、現条里条線と約20mのずれが認められることになる。この溝の評価は、今後の周辺調査の成果を待ねばならないが、可能性としては当地における大規模土地開発の始まりを示す資料になりうると考えられる。II期溝1-OSは基本層序第II-2層の上限を示す資料である。

〈江戸時代〉

前代同様、耕作遺構を主体とする。I B区とIV D区では、基本層序第II-1層に伴う小溝群が検出されている。層位関係から17世紀中葉を上限とする。他にIV B区から17世紀中頃の溝617-OSと18世紀の井戸588-OWが検出されている。

以上が基本的な土地利用の変遷である。



第72図 現条里地割と中世期区画溝の位置関係図 (1/5000)

第2表 III A区西部柱穴群計測表(1)

基盤番号	平面図	底面寸法(m)				柱		上部構造
		幅	深	種	高	柱	板	
386	西門方?	66.0	40.0	11		褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト		上層部1 黑色上部5
387	門	38	35	16	22	褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト		上層部1 黑色上部3
388	門?	33	15	6		不 規		上層部1 黑色1-2-4
389	橋 門?	37	32	3		不 規		上層部1 黑色1-3-4
390	門	27	36	10		褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト		上層部2 黑色上部2
391	小便門	76	25	55	20	黃褐色 (30YR 5/6) 砂質シルト ブロック	褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト	上層部9 黑色上部5
392	小便門	67	56	25		褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト		上層部7
393	橋 門	30	63	23	30	に赤い黃褐色 (30YR 4/3) 砂質シルト		上層部4
394	西門方	80	77	15		褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト		上層部1
395	西 門	37	32	18		褐色 (30YR 4/6) 砂質シルト		上層部1 上層部2
396	橋 門	54	29	16		暗褐色 (30YR 3/4) 鐵砂質シルト シキギ		上層部2 上層部4
397	門	33	32	19		に赤い黃褐色 (30YR 4/3) 砂質シルト 小石含		前部部4 上層部8
398	西門方	55	34	33		褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト		上層部6
399	西門方	49	40	33	24	黃褐色 (30YR 5/6) 鐵砂質シルト	褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト	上層部3 上層部17 黑色上部18
400	西門方?	70	66	14		に赤い黃褐色 (30YR 5/6) 鐵砂質シルト		上層部2 黑色上部16
401	西門方?	40	50	25		に赤い黃褐色 (30YR 5/3) 砂質シルト シキギ		上層部5
402	方	40	36	38	22	褐色 (30YR 4/6) 砂質シルト	褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト	上層部1 上層部2
403	方	40	34	27	18	褐色 (30YR 5/6) 砂質シルト ブロック	褐色 (30YR 4/4) 砂質シルト シキギ	上層部1
404	門	29	37	12		褐色 (30YR 4/6) 鐵砂質シルト シキギ		上層部1 黑色上部2
405	西 門	43	38	15		に赤い黃褐色 (30YR 5/4) 鐵砂質シルト		
406	西 門	70	48	14		に赤い黃褐色 (30YR 5/4) 砂質シルト		
407	西門方	55	75	17		暗褐色 (30YR 3/4) 砂質シルト ブロック		
408	西 門	37	30	14		褐色 (30YR 4/6) 砂質シルト		
409	西門方	76	33	15		褐色 (30YR 4/4) 鐵砂質シルト		

第2表 III A区西部柱穴群計測表(2)

測定番号	平面形	基 础 (m)				埋 地 (m)		上 地
		長 度	短 底	底 高	斜傾角	照	方	
499	門	35	30	7		暗褐色 (10YR 5/4) 砂質シルト		
500	楕円	40.0	28	13		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		上地岩 I 上地岩 II
501	門	38	32	14		褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト		
502	楕円形	41	30	14		暗褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト		
503	楕 (7.7)	25	12.7	2		不 明		
505	楕円形	47	37	21	26	17.5°の暗褐色 (10YR 5/4) 砂質シルト	暗褐色 (10YR 5/6) 砂質シルト	
506	楕円形	47	37	23	30	褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト ブラック	褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト	地岩 I 地岩 II
507	楕 (7)	40	35	15		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
508	楕 (7)	38	32	17	23	褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト	暗褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト	
509	楕 (7)	30	25	12		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト レキッタ		
510	円	32	30	26	20	暗褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト	暗褐色 (10YR 3/4) 砂質シルト	
511	楕 (7)	26	30	10	17	褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
512	楕 (7)	36	35	20		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト レキッタ		
513	円	12	10	- 5		不 明		
515	円	26	25	12		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
516	楕 (7)	30	32	18	24	褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
517	楕 (7)	25	22	5		暗褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト		
518	小楕 (7)	30	24	12		17.5°の暗褐色 (10YR 4/3) 砂質シルト		
519	楕 (7)	48	36	20		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
520	楕 (7)	30	22	20		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
5001	円	7	30	15	2	不 明		
5002	楕 (7)	30	23	7		不 明		
5003	円	10	10	- 5		不 明		
5033	楕 (7)	22	19	14		17.5°の暗褐色 (10YR 5/4) 砂質シルト		

第3表 III A区東部柱穴群計測表(1)

遺跡番号	半 周 長	底 面 (m)				埋 立 高			出 土 考 古 物
		長	幅	厚	深 度	柱根跡	層	月	
348	關 円 方	30	30	28	10	褐色 (30YR 4/6) シルトブロック	灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト		
351	船 円	21	17	15		に赤い表褐色 (30YR 5/3) 砂質シルト			
353	西 内	30	24	8	10	に赤い表褐色 (30YR 5/3) 砂質シルト			鐵軸 1脚
354	円	25	25	14		に赤い表褐色 (30YR 5/3) 砂質シルト			鐵芯 2 1角芯 2
355	木櫛円	34	32	6		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			
356	船 円	61	33	15		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト 灰白色			
357	西 内	47	41	14		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト 灰白色			
358	船 円	42	38	7		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			
359	船 円	30	22	11		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			
360	円	22	22	11		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			
361	円	30	27	10	19	に赤い表褐色 (30YR 5/3) 砂質シルト 灰白色			上織器 3
362	船 円	22	13	2		不 明			
363	円	29	31	10		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			
364	船 円	25	33	20		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			
365	円	30	39	15		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			上織器 3
366	円	20	30	15		不 明			
367	円	30	28	17		不 明			上織器 3
368	円	25	31	9	13	に赤い表褐色 (30YR 5/3) 砂質シルト			
369	船 円	30	30	25		に赤い表褐色 (30YR 5/3) 砂質シルト			上織器 5
370	円	26	24	12		に赤い表褐色 (30YR 5/3) 砂質シルト			上織器 2
371	円	20	30	16		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			
372	円	20	18	5		灰褐色 (30YR 5/2) 砂質シルト			
373	船 円	65	60	20		褐色 (30YR 6/4) 砂質シルト			
374	円	20	22	5		褐色 (30YR 6/4) 砂質シルト			

第3表 III A区東部柱穴群計測表(2)

測定番号	平面形	底 面 (m)				周 長 (m)			測 定 物
		底 径	加 径	底 周	柱根径	周 方	柱 板	柱 板	
300	隅内方	(60)	23	18		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト			土壤基2
	円	23	23	8		に赤い黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト			土壤基3
3004	楕 円	36	22	5		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト			
3005	隅/L方?	(30)	28	5		淡褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト			
3006	楕 円	43	40	12	29	淡黃褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト			
3007	円	36	32	8		淡黃褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト			
3008	円	30	29	9		淡黃褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト			
3021	楕 円	39	30	6	18	に赤い黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト			

第4表 III B・C区柱穴群計測表(1)

測定番号	平面形	底 面 (m)				周 長 (m)			測 定 物
		底 径	加 径	底 周	柱根径	周 方	柱 板	柱 板	
412	円	26	26	7.2		に赤い黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
414	不規則	22	18	12.5		褐色 (10YR 4/1) 砂質土			
415	円	24	24	11.3		褐色 (10YR 4/1) 砂質土			
416	隅内方	34	32	14.4		褐色 (10YR 4/1) 砂質土			
417	隅内方	28	26	9.9		褐色 (10YR 4/1) 砂質土			
418	円	48	40	21.1		褐色 (10YR 4/1) 砂質土			
420	楕 円	50	30	18.8		に赤い黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
421	円	30	26	16.3		に赤い黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
422	不規則	36	22	9.5		褐色 (10YR 4/1) 砂質土			
423	不規則	32	30	12.4		に赤い黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
424	不規則	42	36	11.1		に赤い黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
425	円	30	29	11.0		に赤い黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
426	隅/L方	38	36	9.7		褐色 (10YR 4/1) 砂質土			

第4表 III B・C区柱穴群計測表(2)

計測番号	平面形	柱 穴 (cm)				測 定 部	上 部
		長 径	短 径	深 度	柱 板厚		
427	不規則	40	36	12.1		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
428	圓柱形	22	26	14.1		褐色 (10YR 4/1) 砂質土	
429	円	22	20	4.4		褐色 (10YR 4/1) 砂質土	
430	不規則	22	27	9.2		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
431	圓柱形	43	36	8.7		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
432	円	20	20	4.0		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
433	圓柱形	38	36	17.2		褐色 (10YR 4/1) 砂質土	
434	円	21	21	5.5		褐色 (10YR 4/1) 砂質土	
435	円	18	18	2.4		褐色 (10YR 4/1) 砂質土	
436	圓柱形	55	49	9.6		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
437	角 内?	30	29	14.1		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
438	不規則	42	36	25.9		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
439	不規則	22	18	0.7		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
440	圓柱形	103	79	29.3		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
441	円	36	36	22.6		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
442	不規則	36	33	18.2		點褐色 (7, YR 3/2) 砂質土	
443	角 内?	43	35	24.8		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
444	圓柱形	22	26	11.9		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
445	不規則	31	24	8.7		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
446	圓柱形	41	31	46.3		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
447	円	27	22	19.5		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
448	円	28	27	14.5		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	
449	円	47	43	7.2		に点状高規色 (10YR 5/4) 砂質土	

第4表 III B・C区柱穴群計測表(3)

遺跡番号	平面形	柱 径 (cm)				柱頭形	理 長		施 工 工 物
		前 幅	後 幅	深 度	柱頭形		柱 方	柱 根	
461	不規則	30	28	15.8		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
462	圓門形	41	39	16.7		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
463	不規則	47	44	25.3		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
464	円	17	17	11.9		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
465	円	38	36	25.0		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
466	円	29	25	6.8		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
467	圓門形	41	39	12.4		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
468	右 円	49	39	27.5		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
479	不規則	33	33	7.6		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
471	圓門形	27	25	7.9		柱頭: 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土			
476	円	38	31	16.7		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
480	不規則	49	38	14.1		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
481	右 円?	(37)	42	12.0		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
482	圓門形	41	31	23.7		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
483	不規則	47	38	23.2		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			瓦器類 (1個茎部) 瓦質土
484	右 円	43	34	14.0		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
485	不規則	29	28	17.7		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
486	不規則	36	37	11.2		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
487	円	48	37	12.4		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
488	圓門形	36	35	27.1		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			鐵製
489	円	30	30	7		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
494	不規則	45	43	26.9		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
495	圓門形	45	42	27.8		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			
496	右 円?	(34)	(35)	12.8		柱頭: (7.5 YR 3/2) 砂質土			

第5表 IV D区柱穴群計測表

番号	方位	柱 穴 (cm)				測定 方 法	材 料	出 土 事 物
		長 径	幅 径	深 度	斜傾度			
635	南 内	35	29	15		暗褐色 (30YR 5/4) シルト		
636	西門方	36	40	30		に近い黄褐色 (30YR 5/3) シルト・漂白土		
638	門	36	35	17	17	に近い黄褐色 (30YR 4/3) シルト 黄褐色 (30YR 5/8) シルト・ブロック含む		
640	東 门	42	30	12	20	褐色 (30YR 4/4) シルト		[解説]
641	西門方	48	35	16		に近い黄褐色 (30YR 5/4) シルト		[解説]
642	門	36	36	11		に近い黄褐色 (30YR 6/4) シルト		
645	西 门	40	36	15	16	に近い黄褐色 (30YR 6/2) シルト		
645	木 有	(26)	?	16		灰褐色 (30YR 4/2) シルト		
647	木 有	24	?	15		灰褐色 (30YR 4/2) シルト		[解説] (30251)
648	外	46	33	18	18	に近い黄褐色 (30YR 5/4) シルト 黄褐色 (30YR 5/8) シルトのブロック		
651	西門方	37	33	8		黄褐色 (30YR 5/6) シルト		
652	西門方	60	47	15	15	に近い黄褐色シルトと黄褐色 (30YR 5/6) シルトのブロック	に近い黄褐色 (30YR 4/3) シルト	[解説]
660	木 有	(45)	?	21		灰褐色 (30YR 4/2) シルト		[解説]
3009	西門方	36	36	6		木 有		
5610	木 有	(42)	?	12		灰褐色 (30YR 4/2) シルト		

図 版



清見遺跡周辺（木嶋谷）空中写真（上方が北）